

---

# 魔道に全てを捧げる魔道士と全てを惑わすプリンス

黎奈

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔道に全てを捧げる魔道士と全てを惑わすプリンス

### 【Nコード】

N9471N

### 【作者名】

黎奈

### 【あらすじ】

魔道が栄えるマジナシア王国の姫ルミーの元にある日突然使者が訪れた。その使者は何故か自国の王子を知っているかとたずねる。魔道に全てを捧げるルミーにとってはそんなこと知っているはずがない。それを正直に使者に話すと使者は驚き、そして何故か安堵してまた縁があれば来るといつて去っていつてしまった。

そのことに嫌な予感を覚えたルミーは魔道大会を開いた。

そしてその優勝者はルミーの従兄妹であった。

そして大会後の翌日その使者は現れ、結婚の要請をされる！

何故こんなことにー！？とルミィは困惑した。  
政略結婚をメインとしたお話ですが  
ファンタジーも含ませていきたいと思っています。

## 第一話 大国の使者と魔道大会

「……どちら様ですか？」  
私は聞いた。

今、目の前に立っている、  
どこかの国の、どういう目的で来ているか不明の、使者に私は問いかけたのだ。

「ナイトリシア王国の使者です。  
あなたはマジナシア王国の姫君、ルミー様ですね？」

使者は私に問いかけた。

確かに……私はルミーという名だけれど……。  
そして偶然マジナシア王国の姫になってしまったけれど……。  
いや、そんなことはどうでもいい。

ナイトリシア王国という 大国 がなぜ、マジナシア王国……小  
国に  
使者を送ってきたんだろうか？

私にとってはそこが問題だった。

私の国は魔道には優れているが……他には何の特徴もない小国である。

魔道のせいかな、多少無作法なところもあるが……。

それにここは弱肉強食で成り立つ国、作法そんなものなんて気にもしない国である。

魔道しかないような小国に一体なんで・・・？

「確かに・・・私はルミーですが・・・一体どんな目的で？」

私は眉をひそめて尋ねた。

「目的とは物騒なことをおっしゃる。

では、単刀直入に聞きましょう。

あなたはナイトリシア王国のプリンス・・・もとい、王子のことを  
どう思います？」

使者は本当に単刀直入に聞いてきた。

どう思っつて・・・。

そんなこと聞かれてもなあ。

私は困り果てた。

だって、王子そんなもの気にしてられるほど暇じゃなかったし。

それに興味関心一切なかったし。

更に国同士の交流なんてしたこともないし。

そんな理由があつてか

「一切興味ありません。というか、知りもしません。今日も今朝帰還してきたところですし。」

と、きっぱり言った。

「!？」

使者は私を凝視した。

この世に私<sup>この</sup>のような人がいたとは　って言う目で見られてる・・・気がした。

「え！？知らないんですかッ!？」

使者は声を張り上げた。

私はコクンと頷く。

「ほんとに？ほんとに知りませんか?？」

使者は私になおも聞いてくる。

「はい。何も知りません。」

私は正直に言う。

もともと、興味がなからそんなものは覚え<sup>え</sup>ず魔道に励んでいた。

「あの、うわさ名高いプリンスですよ!？  
それを知らないとは・・・。ほんとにここにきてよかったです」

使者はなぜかほっとしたように胸をなでおろした。

「??？」

何故そこでほっとするの??

私には使者の言動が理解できなかった。

「ルミー様、突然の訪問申し訳ありませんでした。

さつそく、私は国へ帰国しますので。

縁があつたらお会いしましょう。」

「・・・はい。・・・?」

使者は私にぺこっと頭を下げてうれしそうに去っていった。

縁があつたらって・・・できればこないでほしいなあ。

私は心の中で呟いた。

「あの・・・ルミー様、あの者は何故ここへ?」

私の臣下が突然聞いてきた。

「私もよく分からない。」

私は一言ではつきり答えた。

よく分からないのは・・・本当だけど・・・どうも嫌な予感がする。

言葉では表すことができない妙な予感。

それはもしかしたら本能がそう察知しているのかもしれない。

私は考えた。

「そうですか。」

ところで、昨日の依頼はどうでしたか？」

臣下は話題を変えて問う。

「依頼は多少苦戦したけど成功したよ。」

じゃあ、私は自室に戻るね、また書類はたまっているでしょう？」

「はい、たんまりと。」

臣下は頷いた。

「やっぱりね。」

ああ、誰か、代わりを立てようかな・・・。」

私は半ば呟くように言った。

執務も嫌いじゃないけど大変出し、一人じゃ多いし

それに、さっきの嫌な予感も・・・何かあったら代役ほしいからなあ・・・

と、心の中で考える。



「それなら魔道大会を開けばよろしいかと。

ルミー様もその大会でこの王の座を手に入れられたのですから」

臣下は進言した。

やっぱりそれが手っ取り早いよねえ。

私は呟くように心の中で考える。

この国は魔道で栄えた国として、王は魔道の技量で決まる。

そう・・強い者が人の上にたつ王の座を手に入れられるのだ。

王をきめるには魔道大会が一番効率がよい手段ともいえた。<sup>それ</sup>

「じゃあ、それで決まり。

明日にでも大会を開こう。

いいでしょ？」

私はねだるように臣下に尋ねる。

「もちろんです。

では早速取り掛かります。」

臣下はそう言ってすたすた城の中へ入っていった。

「さて私も・・・・・・つう！」

私も城の中へ戻ろうとしたが腹に苦痛が襲ってきた。

あのときの・・・傷がまだ・・・。

「っーーーー」

私はしばらく腹を手で押さえうずくまっていた。

しばらくするとやがて痛みはおさまった。

私はなんにでもなかったように城の中へ戻った。

そして、翌日、魔道大会が行われた。

わあああああ

と起こる歓声。

ドカーン、ヒュヒュッ・・・ザシュッ

爆発音、騒音・・・いろいろな音が会場にこだまする。

私はそれを会場の一番上の特等席で見ていた。

そして、ついに決勝戦が行われた。

相手は黒髪の男と銀髪の男。

私はその両者を見てすぐにその勝敗の行方が分かった。

銀髪のほうだ。

私は本能がそう語っているかのように自然に察することができた。

そして決勝戦は始まった。

ズドン！！

この爆発音で勝敗の行方はすぐに決まった。

「勝者、ゼン！！」

審判が勝者の手を掲げた。

勝者は銀髪の男、ゼンである。

わああああああ

と、歓声が沸き起こった。

私も拍手をした。

その拍手の音で歓声が静まった。

銀髪の男は私を見ていた。

私は自分の席から立ち上がり、ふわっと浮き上がる。

そのとき、突如、腹に痛みが走った。

が、そんなものは気にせず、バトル場の真上まで魔法をコントロールし、移動させた。

そして、銀髪の男がいるもとへ降り立った。

「私と勝負してみない？」

私は男に向かって聞いてみる。

「・・・」

名高いあなたとやれるなら光栄です。  
喜んでお受けします。」

男はお辞儀をした。

そして、

わああああああ

と歓声が上がった。

そしてそれを合図に互いに距離を置いた。

そして試合は始まった。

私はすばやく防御の呪文を唱え、発動させる。

このとき、私の髪は青から銀に染まった。

そして攻撃呪文の詠唱に入る。

相手はすでに魔力を込め、攻撃しに襲い掛かった。

ガッ！！

防御の結界に相手のこぶしが当たる。

結界はもろく崩れ去った。

「舞え！悪魔の花！！」

私の呼びかけの言葉に闇色の花が意思を持ったかのように相手に切りかった。

シュツシュシュツ

相手はこぶしを使わず体をひねらせて紙一重でかわす。

相手はそれを避けるのに苦戦しているようだった。

私は広範囲の呪文を詠唱し始めた。

相手は先ほどの花に苦戦を強いられ呪文詠唱ができていない。

やがて呪文詠唱はし終えた。

この勝負は相手を先にバトル場から出したほうの勝利。

だから私は害を与えない風系統の魔法を唱えていた。

「風よ、嵐を巻き起こせ!!」

私は声を張り上げた。

ぶうわああっああ!!!!!!

風が荒れ狂い、いとも簡単に相手はバトル場から追い出せた。

「ルミー様の勝利!!」

審判が声を張り上げ叫んだ。

私は男に手を差し出した。

「あなた、強いね。」

私は言った。

「そういつてもらえるとは光栄です。」

男は私の差し出した手をつかみ立ち上がった。

「あなたは・・・ゼンだね。」

まさかとはおもったけど・・・私の従兄妹でしょ?」

私は聞いた。

「気づいてたのか？」

いや、気づいて当たり前か。

その銀髪が何よりも証拠だからな」

ゼンは苦笑した。

敬語じゃないせいか、先ほどの雰囲気とはまた違った雰囲気をも  
し出した。

私の髪は徐々に銀から青に変わっていった。

「私は混血だから。

でも、私としてはそっちのほうがいいけど。

それより、優勝おめでとう。

ゼンには私の補佐、をやってもらうよ？」

私は言った。

「補佐、か。

それはやるしかないな。

じゃあ、これからよろしくな、……えーと……」

ゼンは最後と感った。

名前……かな？

「ルミーでいいよ。

呼び捨てでかまわないから。

どうせ、年はそう変わらないわけだし。」

「じゃあ、よろしくな、ルミー。」

「こちらこそ。」

そう言って私はゼンと握手をした。

そしてまたもや歓声が起こった。

こうして大会は幕を閉じたのだった。

そしてその翌日、またもやナイトリシア王国の使者が訪れた。

このとき、ルミーの嫌な予感が本当に当たってしまったことを記しておく。



## 第二話 脅迫つきの政略結婚

「え……。あの、もう一度言ってください。  
聞き取れなかったもので。」

私は戸惑いながらも聞いた。

「で・す・か・ら・、  
あなたはナイトリシア王国の王子、  
シン様の婚約者にと、  
候補に上がっているんです。  
と言うよりあなた様しかいません。」

使者は私の問いにきつぱりはつきり答えた。

えー！？

私がッ！？

こんな私がッ！？

おかしいでしょ！？

私は混乱した。

いつもは冷静で感情など表には出さない。

だが、今回は事が事に婚約者である。

そんなこと勝手に言われたら誰でも混乱するだろう。

「その話、断れませんか？？」

私は聞いた。

それは本心からの願いだった。

傍にいたゼンさえ驚いていた。

「断る!？」

そんなことあつてはなりません!!

というか、これほど名誉で誰もが喜ぶことをあなたは捨てるんですか!？」

なんともつたいないことを!!!」

使者は激怒した。

「名誉・・・ですか？」

私は欲しくもないし、うれしくもないし

捨てても もつたいない なんて思わないんですけど」

私はきつぱり言い返した。

「もつたいたくないなんて・・・。

あなた様・・・恨まれますよ?」

「なんで??」

「なんでって・・・。

そうですか・・・、あなた様はそこから分らないんですね。

つまりですよ、王子、曰くプリンス の隣にいられる立場 というのはですね・・・」

「というのは?」

私は使者に聞いた。

はつきり言うとは故もつたいないのか、何故うらまれるのかが全く理解できなかった。

「誰もが羨ましいと、誰もが望む立場なんです。それをいらないだとか、うれしくないだとか・・そんな人普通ならいるはずないんです。」

「ここに、いるよ？ そんな人」

私は自分を指差して言う。

「・・・・」

使者はあつけにとられ黙ってしまう。

「まあとにかく、私は断ります。なのでお帰りください。」

私はそう言ってゼンを促して使者に背を向けて歩き出そうとする。

「・・・・・いいんですか？」

使者は言った。

私の動きがふとその言葉に耳を傾け止まった。

「え・・・」

「民がどうなってもいいんですか？」

使者は脅すような口調で言う。

「どういう意味？」

私の眉がピクンと跳ね上がった。

「言葉どおりの意味です。」

使者ははっきり言う。

私がこの縁談を断れば民が脅かされるって事????

私はそれに苛立ちを覚えた。

「ですから、あなたがこの縁談、もとい婚約の話を断ればあなた様の国の民は……ということですよ」

「……」

それほどまでに私なんかをその王子とやらは求めているの???

私は単刀直入に聞く。

「いいえ、王子でなく、私どもの臣下がです。王からあなた様にお送りになりました。どうぞ、お受け取りを」

使者は淡々と述べ私に文を渡した。

私はその文を読んだ。

婚約を断れば、国を絶望に陥れる。

もし、受け入れるのなら、あなたの国に援助を送ろう。

私はその文を握り締めた。

ようするにこれは脅迫である。

婚約を断れば実行使し、国を滅ぼす。それが嫌なら受け入れる。

と、言いたいのだろう、この文は。

大国でなければ、やれるものならやってみろ　の一言や二言、言うてやるが、

今回はそうもいかない。

だが、ナイトリシア王国ならそのぐらいやりかねない。

そう予感した。

この国は魔道に優れた者が他の国より多い。

もしかしたらたとえそうなくても反撃は可能かもしれない。

そう考えることもできたが・・・。

だが、それも長期戦となれば話は別だ。

魔力は一時の時間では回復できない。

長い間、少なくとも二日、三日は欲しいところ。

そうなると一日で争いをやめさせなければならない。

それは不可能だろう。

「受け入れるしかない・・・のね。

じゃあ、その代わり、お願いがあるの。」

私は決意した。

仕方がない、受け入れよう。

民の命にはかえられないもの・・・。

「お願い・・・ですか？」

使者は戸惑うように尋ねる。

「私はこの国の 柱 なの。

だから、私にしかできない数々の仕事は山ほどある。

だから、私は婚約してもそれを続けたい。

それぐらいいいでしょう？」

「ですが・・・」

使者は戸惑い反抗しようとした。

「私よりこの国で強い魔道士はいない。

この国は・・・魔道士が多いからたくさんの事件がおきるんだよねー。  
それをおさめるのは誰でもできるだろうけど、  
魔族を滅ぼすとなると話は別でしょ？」

私しかできない仕事のほうが多いし・・・それを拒否となると・・・  
この国は・・・いや、他の国もどうなるか分からないんだよねー。  
そうになると、ナイトリシーア王国も危ないんじゃない??？」

私は使者の言葉をさえぎり、脅すような口調で述べた。

使者の顔は真っ青だった。

ふふふ、やり返し、成功^^

私は心の中にやりと笑った。

「そうですね・・・。

それは仕方ありませんね。

チツ・・・断られるより・・・ましか・・・。  
分かりました。

それは許しましょう。

では早速あなた様は馬車にお乗りください」

「え？今から？」

「そうです。

すぐに向かい、王子と対面してもらい、あちらに移住してもらいます」

「え??

じゃあ、じゃあ、早く支度しないと」

使者の言葉に私は慌てた。

そっちの用意、はやっ!?

「では一時間ほどお待ちしますのでそれまでにお支度を」

「!?!はい、分かりました。」

使者の言葉に驚きながらも私は頷いた。

代役決めてよかった・・・。

そのことに安堵して私はゼンに命じた。

「ゼン、悪いけど、執務お願いね。

私は 脅迫 されてあっちに 嫌々 いかないといけないみたいだから。

それと私があっちに行っても私のほうには私しかできない依頼、送ってよ?」

私は、脅迫 と 嫌々 を強調して言った。



もちろん、使者への嫌味である。

「俺が執務を!？」

ちっ、仕方ないか。分かったよ、ルミー。

王女、お任せを」

ゼンは身分の上のものにする作法をし、すばやく去っていった。

おそらく、いろいろ臣下に報告しに言ったのだろう。

事の成り行きを。

そして私は支度をしに自室にこもった。

しばらく、いろいろ荷物を詰め込んだ。

すると、腹痛が襲ってきた。

「つうっー」

以前より強烈な痛みだった。

っ・・・ヤバイ・・・傷が前よりひどくなってる・・・

だが、今は痛がつてる場合じゃない。

私は痛みをこらえて立ち上がり支度を済ませ使者のもとへ向かった。

そこには既にゼンもいた。

「手が空いたら会いに行くからな。」

ゼンが心配そうに言う。

「そうしてくれるとうれしい。」

あ、あとゼン、魔法の腕、磨いいてよ。  
また手合わせしたいから」

私は微笑んで言う。

「ああ。そっちも研究頑張れよ。  
体もなまらないように 剣の腕も・・・な？」

「知ってたんだ？ゼン。  
だったら、お互いに頑張ろうね。  
だからそのためにもたくさん依頼を送ってよ？」

私は意外だと思わんばかりに言う。

ゼンの言うとおり私は剣も扱える。

剣士にして魔道士でもある私はほぼ無敵。

と、いつでも過言ではない。

「同じ一族だから知っていて当たり前だ。  
ああ、たくさん送るから、覚悟しとけ」

「もちろん」

私はゼンの言葉に頷いた。

「お時間です、ルミー様」

使者が私をせかした。

わかってる と、使者に言っ て私は馬車に乗り込んだ。

「じゃあ、後のことはお願いね」

「ああ、まかせとけ」

私はゼンに微笑み、ゼンも微笑んだ。

そして私は馬車に乗ってマジナシア王国を出たのだった。

いや、馬車に連れ去られたのだった。・・・かな？

### 第三話 プリンスの女嫌い

「聞きたいんだけど、何で私のような人を臣下たちは求めたの??」

私は使者に聞いた。

「王族は国の政治を動かす人です。  
当然、後継者は必要でしょう?」

「それは・・・そうだけど。  
なんでまた、プリンスとやらに興味関心その他もろ知らない人  
を候補に入れたの?」

使者は私が真に聞きたい理由ではないほうを答える。

だから私は明確に聞けるよう、たずねた。

使者は・・・

「プリンスは女嫌いなんです。」

と、残念そうに答えた。

「は?」

それじゃあ、当然、わたしもだめでしょう?」

私は拍子抜けた声を出し問いかけた。

「プリンスは誰をも魅了する容姿をお持ちです。」

ですから、誰もが惹きつけられ、誰もがプリンスの隣にいることを望みました。

私たちはそれを知ってて尚候補を探し出し、候補に仕立て上げ王子に会わせました。

候補の誰もが隣を望みました。

つまり皆、同じ考えをお持ちですからですからプリンスも嫌になったのだと思います。」

「それ・・・自業自得」

私は使者の話を聞いてそう答えた。

だってそうでしょ。

臣下どもがそういう奴をほいほい候補に上げたから  
プリンスは嫌気がさして拒んだんだし。

あ、そうかんがえると、私はその臣下を恨めばいいわけか。

私はそう納得して

「臣下のした行為がそうさせたんなら私は王を恨むより  
あんたたち臣下を恨めばいいんだね？」

と、聞いた。

「え・・・」

そ、それは困りますっ！

う、恨まれたりでもしたら・・・どんな不幸がふりかかるか・・・」

使者はうろたえて困ったように言い出す。

ぷっ・・・からかいがある。

いや、でも恨むのはほんとだよ。

こうなったのは全部こいつらのせいだし。

「不幸？

そんな優しいものじゃ私はおさまらないなあ？

不幸にあってもらうより、地獄にあってもらわなきゃ・・・ふふふふ  
ふ」

私は意味ありげな笑い声を出す。

「ひいー”　”」

と、使者は悲鳴のような声を出して顔を真っ青にする。

「ふふふ、この際、呪っちゃおうかなあ？」

私は止めをさすように言う。

「の、呪い！？」

使者は裏声を出し失神した。

「あ、この人、本気にした・・・」

私は思わず呟いた。

ぷっ、呪いなんてさすがにそこまではしないのに。・・・そこまでは。

私は失神した人を見つめ・・・

「うつ」

とうめき口元に手を当てた。

きもちわるいい・・・

吐き気がのどに襲った。

馬車に酔ったのかもしれない。

失神した使者が目を覚めたのはナイトリシア王国の王城に着いたときだった。

城はマジナシア王国の城より、派手に装飾されており目がチカチカした。  
私の国

着いてすぐに城の中を案内された。

外見もすごかったが、中もすごかった。

意外に広く、とても長い廊下が続いている。

いろいろなところを案内され、最後に自室に案内された。

自室の部屋隣は王子の自室だと言う。

部屋は以外に広く、寝室、リビング、個室、トイレ、風呂・・・などがあった。

そして最後にこれを着ると言ってきた。

それは華やかな青いドレス。

いや、この城ではこれが正装なのだろう。

私はそのドレスをまじまじと見つめ、自分の服装も見た。

シャツにズボンにロープ。

ズボンのベルトには護符がついており、額には護符用バンダナをつけている。

そして耳につきをかたどったイヤリングに白い手袋、それに動きやすい靴。

長い自慢の青髪はポニーテールに結い上げている。

手袋で見えないが手の甲には魔方阵が描かれている。

これが魔道士の正装。

やっぱり、この姿はいけないんだあ。



私は落ち込んだ。

今から華やかなドレスを着なければならいなんて・・・。

「この服装が私の国の正装なんですが、このままではいけませんか？」

前者 ここまで強制するつもりか、この野郎っ、お前ら叩きのめすよ！？（本心）

後者 そこまでするんだったら、本気で呪うよ！？（本気で呪いたいと言う願い）

私は後者のほうを付け加えて言った。

そういうと、付け加えた言葉がよかったのか使者は顔を真っ青にして

「呪われたくないですからそのままでもいいです。」

と、素直に言ってくれた。

効いてる効いてる。

私はうれしくも心の中で呟いた。

「では、対面を。・・・プリンス、姫をお呼びしました。」

使者はそう言って王子の自室をノックした。

「側近、プリンスと呼ぶなら二度と入れない。」

王子？の声が聞こえた。

側近……。へえ、やはり、ただの使者じゃないんだ。

「すみません、王子。」

使者「側近は言い直す。」

「それもやめろ。」

王子は怒ったような口調で言った声が聞こえた。

「つい、言ってしまいました。」

すみません、シン様。

姫が来ました。

対面を願います。」

「・・・」

王子の声は聞こえない。

「・・・私は別にしなくてもいいけど」

私はそう呟いた。

「！？ルミィ様！いくらつれてこられたからといっても限度があります！！」

撤回してくださいっ！」

使者は顔を真っ青にして怒鳴る。

「撤回なんてする必要はないよね？  
私は早く帰りたいんだし。」

私はすました口調で言う。

「帰りたくても撤回してくださいっ。  
何のために私があなた様をつれてきたと思ってるんですか！？  
その努力が無駄になりますっ！！」

使者は逆に顔を真っ赤にして怒鳴り散らす。

ああー、頭が痛い。

頭痛までしてきたらこの人はどう対処してくれるだろうか。  
酔いがまださめていないのに。

「無駄になってもいいんじゃない？  
私の知ったことではないし。  
第一、あなたの主は嫌がってるじゃん。  
主のために何とかするのが側近の仕事でしょう？」

私は責めるような口調で言う。

「そ、それはっ！？」

使者が言葉を詰まらせたとき、王子の部屋の扉は開いた。

「お前か、30番目の候補者は」

王子は私に目を向けて言った。

使者の言うとおり、すばらしい？容姿の持ち主だと思う。

私にはこの人のどこに皆が惹きつけられたのかが分からない。

「・・・。」

お初にお目にかかります、ルミィといいます。」

一応、挨拶した。

「はい、30番目です、シン様」

使者は青ざめて言う。

「俺はシンだ。」

シンは私を見て言う。

シンの瞳は紫色だった。

髪色も紫。

「・・・。」

「・・・。」

私もシンも何も話さないから会話？が続かない。

「シン様、

あなた様と接してこられた女性とは一味違う女性を連れてきたので

すが・  
感想は？」

使者は沈黙の重い空気に嫌気が差したのかシンにたずねる。

「めずらしい」

シンは一言、言葉をつむいだ。

「あなたからみれば、珍しいですね、確かに。  
私は魔道士ですから」

私はシンの瞳を見て言う。

「・・・」

シンは何も言わずに私を見る。

「でも、私もあなたを珍しいと思う。」

私は言った。

本来なら言わなくてもいいことだけと言いたくなった。

早く帰りたい一身で。

「？」

シンは眉をひそめた。

「私はあなたのどこをみて皆が惹き付けられる事が  
すごく私は不思議で思えてならない。」

私はそう言った。

「ルミー様!!」

使者が叱咤した。

「!!」

シンは目を見開いた。

「・・・俺もわからない」

シンは言った。

自分も分らないんだ。

私も容姿に惹かれる人の気持ち理解できないな。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

またもや会話がなくなり再び沈黙が訪れる。

カチカチカチカチ・・・

時計の針が動く音だけが響いていた。

カチカチカチカチ・・・・カチン・・・・カチカチカチカチ・  
・・

すると、時計の秒針が動く音から分針が動く音に変わった。  
そして再び秒針が動く音がし始めた。

「シン様、ルミー様、夕食のお時間です。  
シン様、食事の間に足をお運びください」

使者がそう言ってシンを促した。

「側近さん、あれにきがえなきゃだめですか？」

私は聞いた。

「はい。王も来られますから。」

側近は頷いた。

「はぁ・・・。仕方ないですから着替えますよ。  
先に行ってください。着替えたら行くので」

私は深いため息をして声のトーンを落としながら自室に戻った。

それをシンは眉をひそめながらルミーの後姿を見ていた。





#### 第四話 毒と条件反射

私は部屋に戻り、青のドレスに着替えた。

ドレスに着替える際、髪は解いた。

そして、バンダナと手袋をはずす。

すると、手の甲に描かれた魔法陣があらわになった。

解いた髪は次第に邪魔になってポニーテールに結い上げた。

すると、前髪も少し持ち上がり、額に小さなクリスタルが見え隠れした。

バンダナはその宝石を隠すためのものでもあった。

額にはめられている小さな宝石を隠すように髪を解き結いなおした。

イヤリングはそのままにし、私は部屋を出た。

そして食事の間に私は向かった。

食事の間の扉の目の前にあのとくにいた側近がいた。

「ルミー様、その手の甲は・・・」

側近は戸惑った。

「これは・・・あなたには関係ないものよ。  
消せないものだし、べつにいいでしょう?」

側近の戸惑いが私の思うこととは違うことだと分かっているながら言い放つ。

「そう・・・ですね。

じゃあ、お入りください。

皆様がお待ちです。

席はシン様の右隣に。」

使者はそう言つて扉を開けた。

食事の間にいた者は皆、私に視線を向けた。

私はそんなものは気にせず言われた席に着く。

シンは私ではなく、私の手の甲を見つめていた。

「・・・」

「・・・」

シンは何も言わないから私も何も言わない。

しばらくすると、王も現れた。

そして食事は始まった。

皆が食事に手をつけ、おしゃべりを楽しんでいる。

私は食事に手をつけられなかった。

いや、手につけるものではないと思う。

なにせ、毒入りのものだと分かってしまったのだから。

私は出された料理を無表情に眺めた。

毒が入ってる……。

側近の話が今理解できた気がする。

この人王子の隣ってすごい厄介なものなんだ。

私は今思い知った。

いや、そんなこと考える必要なんてないし、ただそう思ったただけだ  
けど。

毒が入ってるって事は私、帰ってもいいよね？

ねえ、誰か、帰ってくださいって言うてよ。

こんなものドレス着て、

こんな所皆が集まる所で

こんなことなんで食事会なんて

しないといけないの？

私はそのまま、料理を眺め続けた。

「食べないんですか？」

側近が私に聞く。

「・・・」

知ってて聞くの？」

思わず私は言い返してしまった。

「は？」

側近は眉をひそめる。

「私、気分悪いから部屋に戻るね。」

「！！！」

「？」

側近は目を見開き、シンは眉をひそめる。

私は呪文を唱え始めた。

瞬間移動という高度な魔法。

これは私が研究に研究を重ねて作り上げたオリジナルの魔法。

それを今呪文詠唱している。

本来ならすぐにでもその場から移動できるが今回はやたらと呪文の効き目が遅かった。

傷のせい・・・かも。

そう思えて仕方がない。

だが、そう思う余裕がなくなった。

今、呪文は完成した。

「移動」

私は呟いた。

そしてその瞬間、私は その場 食事の間 から消えた。

ヒュッ・・・スパン

到着したのは自分の部屋。

この城で用意された自室だ。

「うつ」

私は口元に手を当ててひざを突いた。

あ、やばい、吐き気がしてきた・・・

この瞬間移動の欠点は酔うこと。

私は酔いやすいほうだから余計に吐き気がする。

馬車の酔いもいまだにまだうつすらとあったからそれに追加して気持ち悪かった。

そして突如、腹痛も増してきた。

「くっう”っー！」

私は苦痛に耐えかねてその場に倒れてうずくまる。

・・・ヤバイ・・・意識が朦朧としてきた・・・

視界もぼやけたとき、部屋の扉が ガターン と音を立てて開かれた。

「おいっ！！」

そう、叫んだのはシンだった。

シンは私の傍まで駆け寄り、抱き起こした。

「うう”・・・」

急に体が起き上がるから吐き気が増し、腹痛も増した。

「おいっ、どうした!？」

「っー」

シンが声を荒げて叫ぶ。

そして体を揺らす。

「おいっ!・・・!？」

シンの目は見開かれ、揺さぶられる手が止まった。

シンには見えたのだ、私の額で光るクリスタルを。

「・・・」

「・・・」

しばらく沈黙状態に陥っていた。

その間に吐き気と腹痛は治まってきた。

それを感じると

「もう、大丈夫だから。放して」

と、私は言っつてシンから逃れた。

シンは私を抱き起こした手を私から放し、

次は私の前髪を跳ねのけて、額をまじまじと見つめた。

私はその手を振り払って立ち上がった。

シンもそれにつられて立ち上がる。

「お前・・・」

「クリスタルはあなたにこれ関係ない。  
もう大丈夫だから帰ってもいいよ。」

私はシンから目をそらして言う。

「・・・」

シンは黙ったままその場を動かず私を見据える。

帰っては・・・くれないか。

私は言葉で言うのを諦め呪文を唱えだした。

「？」

私は小さい声で呪文詠唱する。

呪文は完成し、私はシンの手に触れた。

すると、瞬時に私の前からシンはいなくなった。

私が追い出したのである。



開け放たれた扉を閉めて私は着替え始めた。

追い出されたシンは今ほまともに動けないだろう。

そんなことを考えながら私は着替えを終わらせ、ベットにもぐり込んだ。

そしていつしか眠っていた。

夜、気配がした。

その気配は私の部屋に近づいている。

殺気はなく普通の人が出す気配なのに、  
その気配を持つ人が部屋の扉を開けたとき、私はその人に刃を向けていた。

「!？」

「・・・・」

その気配の正体はシンだった。

シンは目を見開き、しりもちをついた状態で硬直している。

そう、私は今その人を襲ったのだ。

扉が開かれその人が入ってきたとき、  
私は飛び起きて小刀を持ち、その人に切りかかった。

その人はその驚きで隙を作り

私がそれを狙ってバランスを崩させ、しりもちをつかせたのだ。

そして小刀はシンの首に突き刺さる直前にある。

「あ・・・あなただったのか」

私はそう呟き小刀を下ろした。

今、ようやく私は意識をはっきりさせたのだ。

つまり、今までの行動は 寝ぼけていたための行動 だったわけである。

あ・・・体が勝手に・・・。

この前もそうだったなあ。

私はこの前のことを思い出していた。

大会が開かれた夜、ゼンが私の部屋に訪れたのだ。

そのときも私が寝ぼけて反射的に襲い掛かったわけだが・・・。

あああ。

同じ過ちを繰り返してるし・・・。

私はんー困ったなと考える。

どうも、魔道士やってると、仕事をやった夜とか、その前の夜とかに倒して名を上げるって言う連中が寝込みをよく襲ってきたのだ。

だから、条件反射っていうのかな。

このごろは相手に殺気がなくても襲い掛かってるし、今回も・・・おなじように。

「ごめんなさい、つい、体が勝手に・・・・・・・・・・」

私は謝ろうとした。

だが、腹痛が襲い言い訳がいえなくなる。

「!？」

私は自分が支えられなくなりひざを突く。

カタン

と、小刀が床に落ちた。

私は腹に手を押さえ、うずくまる。

「おいっ!」

シンが叫ぶ。

「う”う”うう」

私は我慢できず倒れこむ。

シンは私を支え、

「おいっ、どうした!？」

と言って叫ぶ。

さっきみたいに痛みがおさまる気配はなかった。

逆にひどくなるばかりだった。

激しい痛みが私を襲う。

「う”っつう”う」

激痛に苦しさも加わって意識が朦朧としてきた。

「おいっ!？お前・・・!？」

シンの声のトーンが一気に変わった。

明らかに動揺していた。

さっきとは違う同様だった。

それは驚きだけではなく戸惑いと衝撃的な事実が映っているかのような声の響き。

私はその声に一度、目を開き、シンを伺った。

シンは私の腹部を凝視している。

私は自分の腹部を見た。

そしてそこを抑えていた自分の手も。

「え．．．．？」

私は一瞬痛みを忘れた。

その衝撃的な事実を見て。

それを触れていて。

それは．．私の 血 だった。

紅い血は私の腹部を赤く染めている。

そして手もまたうつすらと染めていた。

そのことに気づいたシンも衝撃的過ぎて凝視することしかできなかった。

だが、痛みを忘れていたのはその瞬間だけだった。

「くうっ！・・・う”うう」

激しい痛みには私は体をよじらせ、うずくまる。

そのことにはつとしたシンは

「お、おいっ！！しっかりしろッ！！」

と、さけび、私を抱き起こす。

だが、その行動で私の意識は暗転した。

体はシンに預けるように、そして首はカクンとのぞけた。

シンはそれに激しく動揺し、すぐに側近を呼んだ。

## 第五話 混血の証

「ん・・・」

私は意識を取り戻した。

目を開け上半身を起こす。

「動くな。傷に支障が出る。」

そう言って私をけん制したのはシン。

「傷・・・」

私はそう呟き、毛布で見えない自分の腹部に目を見る。

そして毛布を剥ぎ取り、寝巻きから少し覗いて見た。

そこは包帯で巻かれていた。

私はその傷を手でなぞる。

「・・・ふさがってる・・・」

私は思わず呟く。

前は止血で精いっぱいだったが、今はほとんど傷がふさがってる。

だが、その傷の部分が膨らんで腫れていた。

「ふさがってるに決まってますよ、  
なにせ、医者が全魔力と最高級の薬草で施した治療でしたから」

シンの近くにいた側近が言う。

「ありえない。

魔力と薬草だけでふさがるはずがない」

私は目を見開いて側近に尋ねる。

「そりゃあ、輸血もしましたからね。」

「!？」

側近の何気ない言葉が私を混乱させた。

輸血!？

私は血相を変えて立ち上がった。

急に立ち上がったせいか、体がふらつきバランスを崩す。

「おいっ、まだ動くなといったはずだ。」

シンが静かに言う。

だが、私はそれどころではない。

「洗面所につれてって」



私は呟くように言う。

「？」

「はやく・・・お願い。・・・う”う！」

「！？」

私は口元を押さえ、吐きそうになるのを防ぐ。

シンがいつまでもつれてつてくれないから

シンから逃れよたよたとした不安な足取りで洗面所に向かう。

そして洗面所の洗面器のふちを手でつかみ体を支える。

するとそれを待っていたかのようにのどに吐き気が襲ってきた。

「ぐえっ！」

私はたまらなく苦痛でのどに這い上がってきたものを口から吐き出した。

「！？」

「！？」

二人はそれを見て一体どんな表情をしただろう。

「ぐっ・・・げほっ、・・・げほっ」

私は我慢せず、のどから次々と来るものを吐き出した。

ビシャッ・・・ドバッ

洗面器いっぱいに広がるのは赤い血。

「うえッ・・・くっ・・・げほっ・・・げほっ」

私はめいゝいっぱい吐き出した。

白かった洗面器は赤く染まり血で満たされる。

口の中がヌメヌメしていて気持ちが悪い。

う”う、・・・どんだけ輸血したの・・・気持ち悪い。

「うーっぐっ・・・うえっ！」

のどを襲う吐き気に目が潤む。

次々と吐き続ける私を二人は呆然と見ている。

「っーーーーげほっ」

私は吐き出さなければならぬものの全てを吐き出した。

「っ・・・う・・・けほっけほっ」

私はのどの気持ち悪さに乾いた咳をして、洗面器の蛇口に手を伸ばしひねる。

ジャー

出てきた水が私の吐き出した血を全て洗い流した。

ついでに自分の手も洗い、顔も洗う。

そしてタオルで顔を拭き、手からも水を拭う。

私はその動作を呆然と見つめる二人を見た。

「何でつて聞きたい顔してるね、二人とも。」

私は言った。

「・・・」

「・・・」

二人の表情は先ほどから変わらない。

驚いた目で私を凝視しているだけ。

私は右手の甲を二人に見せた。

「!？」

「!？」

「これはね、人間と人だけど人間ではないものとの間に生まれた証、なんだよ。」

「!!」

「!!」

「これを、皆は 混血の証 と呼ぶの。」

「!」

「!」

私の言葉に先ほどから表情を変えるだけで言葉をまるで発さない二人。

「混血者は皆、右手の甲に刻まれるの、この異様な魔方陣を。」

「・・・」

「・・・」

二人は何も言わずに私の右手を見つめる。

私は右手の甲をなでながら

「純血者はこの魔方陣を刻まない。  
変わりに左手の甲に神聖で複雑な魔方陣を刻まれるの。」

と、言った。

私は続けて言葉を発する。

「混血者は人間と人だけとそうでない者のハーフ。つまり、両方の血が私の中に流れているの。」

これは誰でもわかるよね？」

私の言葉に二人は頷く。

「で、混血された血は新たな何かを生むけれど、それと同時に両方の血が対抗しようと、拒むの。」

人間の血は誰でも受け入れようとするけれども、人だけとそうでないものは違った。

あらゆるものを拒絶した。  
特に人間の血は。」

「……！？」

「……！？」

二人は強調された人間の血という言葉に青ざめた。

「感づいた？」

あなたたちは私を思って輸血をしてくれたんだろうね、そしてそのおかげで傷はふさがりかけようとしている。

でもね、私の意思関係なく、私の中にある 人ではない者の血が  
拒絶したの。

それがさっきの現象。」

「！」

「！」

二人は目を見開いて私を見つめるばかりだった。

「じゃあ、何故、私の中にある人間の血は拒まれないのか・・・  
誰だって不思議に思うよね。  
でも答えは単純。」

それは 混血された血は新たな遺<sup>血</sup>伝子を生むから なの。」

「！？」

「！？」

「だから私の血は拒まれない。」

ねえ、側近さん輸血のときの血はどういうの？  
詳しくきくと・・・うーん、人間の血の何型？？」

私は 人間の血 ということ的前提に聞いた。

「・・・あなた様と同じ A型・・・です」

側近は言った。

「そう、そうだね、それは私の中の血の血液型と同じ。  
でもね、同じ型だからっていう理由じゃあ受け入れてはくれないん  
だよ。」

だからね、

もう私が危ない目にあって重傷を負ったとしても

輸血だけはしないでよ？」

私は言った。

「あのままだったらお前は死んでいた」

シンが静かに言った。

「それは・・・ありえないな」

私はその言葉に悲しく微笑む。

「何故だ？」

何故、そういいきれん？」

シンは眉をひそめて問う。

「私はいくら重傷を負っても苦しんでも死にきれないの。  
私の中にある 人ではない者の血 がそうさせているから。」

私は言った。

ありのままの事実を。

「それは何故だ？」

「さっき言った言葉とおりですよ。

私の中の血がそれを許してくれないってこと。

理由は……。私にも分からないなあ」

私は言った。

「……」

「……」

私たちの会話がなくなり沈黙が訪れた。

何か話そうとしたが急にめまいがした。

「っ……」

視界がグニャッと歪み、体が前方へ倒れていった。

「おいっ」

シンがそれを受け止め私を抱き上げた。

「無理をするな。」

「……。してないよ」

シンの静かな物言いに私は怖気づきながらも呟くように言う。



シンは私をベッドの上にゆっくりと寝かせた。

寝かされた状態はあまりにも気分的に害するから私は上半身を起こした。

「・・・朝食をお持ちしました。どうぞ、召し上がってください。」

側近がテーブルの上から私の目に前においた。

私は一目見てそれを、

「毒が入ってる。」

と、言った。

「！・・・この中には毒ではなく薬が入ってるんですよ。」

側近は言った。

「昨日の夕食にも毒が入ってた。  
そんな怪しいものは食べたくない」

私はそう言って顔を横にそらした。

ぐいっ

すると突然、シンに顔を向かされ、口の中にパンを入れ込んだ。

「ふぬっ！？」  
「ふぬぬう、ふぬうっ！？」

「たべろ」

シンは私の反抗を無視してじっと見つめる。

「……もぐもぐ」

私は口につつまれたパンを吐き出すわけにも行かず噛み砕いて食べた。

「いきなり、つつこまないでよ」

私は訴えるような目でシンを見る。

「お前が食べないと言い張るから悪い。」

シンは言った。

「言い張るに決まってる。」

そんな得体の知れないものを食べるって言われてたもんだし。ところで側近さん、昨日の夕食には何が入ってたの？」

私はシンに言い返し、側近に問う。

「知ってて聞くのかと問われましたので不思議に思い調査しましたよ、もちろん。」

入っていたのは毒物です。

じわじわと効果を発揮させると言う特徴を持った有害物でした。」

と、すました口調で答える。

「で、今のパンには何が入ってたの？」

私が疑い深い口調で聞くと

「あなた様が一番お分かりなのでは？」

と、言い返される。

「やっぱり、知られると知ってて出したのね。」

あなたはその薬を知ってて私の口に突っ込んだの？」

私はシンの方を見て聞く。

「・・・」

どう解釈していいかわからない反応。

「ま、いつか。」

私には生憎とこの薬は効かないし。

あ、そこにある用紙って依頼だよね？」

私は無理やり起き上がって側近に問う。

「ええ、そうですが・・・。」

もしかして今から行くのですか！？」

「あなたたちには関係ないでしょ？」

私を止める権限なんてないんだから」

私はそう言い、テーブル間で歩いていき、用紙を手を取った。

忠告、傷が治るまでこの依頼は避けて欲しい。

今回はある屋敷に住み込んでしまった 吸血鬼 の退治。

屋敷のものは皆、吸血鬼化してしまい、町に被害が及んでいる。

町はマジナシアとボルダングの国境にあり、宗教都市 と呼ばれている。

注意、吸血鬼はより精神力の高いものの血を好む。  
血を見せてはいけない。

忠告を聞き、注意に気を配り、依頼を達成してくれ。

「なるほどね」

私は呟いた。

「お前はしばらく安静にしてろ。」

シンは言う。

「だから、あなたには関係ないでしょ、そんなこと」

私はシンをにらみながら言う。

「シン様になんてことを！！  
助けてもらってなんですかッその言い草はッ！！」

側近は声を張り上げて言った。

私はひるむことなく

「誰も助けてなんていってないし。  
勝手に助けたのはそっちでしょ？  
それにさっきも言ったけど私は 瞬殺 でもされない限り 死に切  
れない の。」

あの状態が続いても私の血がきつと何とかしてたよ。」

と、言った。

「してなかったらどうするんだ？」

シンが問う。

「別に。どうもしないし。」

私はそんなに 生に執着 してないし。

執着してるのは 魔道 だけ。

私は生涯、魔道 だけに尽くすの。

もともと強制で縛り付けられた婚約だし、  
解消しようとその気になればとくことだってできる。」

「あなたには民がどうなってもいいんですか？」

側近が青ざめて言う。

「私たち、マジナシア王国の民をなめられては困るよ。  
その気になればいつでもできるし、だけどそれは最終手段。  
こんな大国相手するほどばかじゃないよ。  
よほどのことで狂わされなければ。」

私はそう言い放った。

「・・・」

「・・・」

二人は私の言葉に黙ってしまふ。

「じゃあ、ちょっと、追い出させてもらつよ。」

私はそう言つて呪文を唱える。

ん？魔法が使えない？

私は発動しない技を見て首をかしげる。

あ、イヤリングないし。

そういえば魔力も吸い取られるようにして・・・。

ちっ、しょうがない。

混血の証を使うか。

「我が血よ、我がいざなう元へ汝らを導け。」

混血されし血よ、我の命を聞け。」

私はそう言い放ち、右手を二人にかざした。

シュパン

二人はどこかに消えていった。

「ふう」

私は息を吐き、着替え始めた。

そして門の兵に依頼で出ると伝えた。

そして出て行こうとすると、シンが現れた。

「行くな。」

シンは言う。

「よくそんな体でいえるね。」

私が出たんだから何もいえないけど。  
どうしてそんなことを言うの？」

私は聞く。

「お前のような奴は初めてだ。」

俺を見た誰もが同じような言動をする。  
だが、お前は違う。」

「違うに決まってる。

私は私。

私はあなたに何も望んだりもしない。  
それに依頼をこなすのは私の仕事。  
ここまで強制される筋合いはない。」

私ははつきり言い切る。

「私とあなたには婚約者と言う以外のつながりは何もない。  
だから、邪魔しないで」

私はそう言って門を出ようとする。

するとぐいつと腕をつかまれた。

「なっ!?!」

「行くなといったはずだ」

シンは静かに言う。

そして私を抱き上げた。

「ちょ、ちょっと、私は行きたいんだけどっ、  
なんでいきなりこんなこと・・・」

私は暴れた。



だが、力で押さえつけられ、抵抗は無意味になった。

「混血の血がなければお前は魔法を使えない。  
無理に行く必要がどこにある。」

「だから無理じゃないし。  
ていうか、降ろしてよ。」

「降ろしたらお前、出て行くだろ」

「当然、行くに決まってる。」

シンは私を抱き上げ、城の中に戻った。

そして城の中では甘い空気が漂った。

「なっ・・・これ・・・は・・・」

突如、鼻に甘い香りが染み付いてきた。

その香りが眠りを誘っている。

これは、眠りのお香だ。

「くっ」

齒を食いしばり持ちこたえようと我慢する。

だが、体から力が抜け、抵抗できなくなり、意識が朦朧としてきた。

「よく持ちこたえられるな。

魔力がないくせに。悪あがきはよせ、  
後からその反動が来る。」

シンはそう言い、私の部屋に入る。

そしてベットの上に押し付けた。

「寝ろ」

シンはそう言っ て毛布をかぶせた。

私は眠気に我慢できなくなり目を閉じた。

そしてすいつけられるように眠りについた。

## 第六話 脱出

私は目を覚ました。

上半身を起こし、部屋を見渡す。

誰もいない・・・

そのことに安堵し、部屋を出た。

すると、廊下からたくさんの気配を感じた。

・・・監視役？

そう思えて仕方がなかった。

私は手に魔力をこめれるか試した。

ホワン

魔力は手に集中した。

よし、回復してる。これなら・・・

私は部屋に戻り、文を書き終わると呪文を唱えた。

ヒュッ

私が移動したのは城の真上。

私は風をコントロールしてマジナシア王国に向かった。

今は夜。

夜は静かで町の明かり一つない。

深夜ぐらいたろうと私は決め付けた。

町外れに飛び降りてそこから徒歩で城に向かった。

気配がした。

明らかに私を狙う人たち。

私は立ち止まった。

追い払うための呪文も詠唱完了していた。

だから早く来いという合図である。

私を狙った奴はその誘いにまんまと引っかかり私の思惑通りに動く。

私は魔法を解き放った。

「風よ、汝らを戒めろ！」

呼びかけに風は応じ、私を狙った奴は拘束される。

「朝までそうしてればいい」

私は冷たく言い放つとすたすたと城に歩いて向かった。

そして夜明けと共に自分の城へ帰ってきた。

城の門まで行き、

「ゼン、ゼン、来たよ。門開けて」

と、言う。

すると、ガラガラガラ と音を立てて門は開く。

私は門から城の中へ入る。

そうするとゼンが出迎えた。

「よく、抜け出せてきたな？」

ゼンが問いかけるように言う。

「夜中に抜けてきたからね。」

早速だけど、いろいろ用意させてもらってもいい？？」

「ふあわわあ。朝早く起こしたことを謝ればな？」

私のお願いにゼンは大げさにあくびをして言う

「それはごめんね。こっちも大変だったんだから、仕方ないし。」

私がそう言つと

「はいはいわかったよ」

と、軽く受け流し、私を抱き上げた。

「なっなに！？いきなりっ！？」

私は戸惑う。

「ルミー、自覚しろよ、お前、顔色悪いぞ。」

ゼンはあきれたように言う。

「あはは、変な薬飲まれたせいだよ、きっと……」

私は うとうとしてきて抵抗するのをやめた。

ゼンは私を抱き上げたまま城を歩き、

「何を準備して欲しいんだ？寝る前に答えるよ？」

「んー…魔力粉…ふたふくろ…銀の腕輪…ふたあつ、浄化の杖、

…それと…破邪の剣…それだけ……」

「やけに注文多いな。」

心底嫌な顔をするゼン。

「んー、それも承知でお願い・・・あと・・・昼になったら起こして・・・」

私はそれだけ、言っとまた眠りに着いた。

「ったく、注文の多い、姫君だな」

ゼンは嫌そうな物言いで呟くがどこことなくうれしさも混ざっていた。

## 第七話 無自覚

「ルミー様、用意いたしました。昼です、起きてください。」

どこかで聞いたことがある声がする。

でも、言葉遣いが違うような……

「んー、まだ眠い。」

私は寝返りを打つ。

「眠くても起きてください、」

また声がした。

私は毛布をかぶる。

「おい……いい加減にしろよ。」

人が敬語でさわやかに起こそうとしてるのに、わがまま言いやがって……

おきろっ、ルミー!!」

怒鳴り声を上げられて毛布をはがされた。

「んー、あ、ゼン……」

私は眠い目をこすって起きた。



「あ、ゼン・・じゃないつ。

一発で起きろよ。ルミィ。」

寝顔は無防備すぎて俺は我慢できん」

ゼンは、はぁーとため息をついて言う。

「我慢？」

私は眠たい目をこすりながら聞く。

「な、なんでもない。

とにかく、用意できたから、さっさと依頼行つて来い。

お前の婚約者、来るぞ。」

「え？」

ゼンの言葉に私は目がさえた。

「お前を探してあちこちうろついてる警備隊がいる。

ルミィ、見つかるぞ。」

ゼンはあきれたように言う。

「ヤバイね、それ。

ゼン、起こしてくれてありがとう。

じゃあ、早速行くよ。」

私はそう言って立ち上がり、ドアのほうに向かうと、腕をつかまれた。

「おい・・・飯も食わずに行くのか？  
それは許さないからな」

ゼンは真剣な目つきで言う。

「あ、忘れてた。」

私は思い出したように言う。

「おいつ。忘れるな、そういうこと。  
すぐ持ってきてやるからここで用意しろっ」

ゼンは私をにらみ、部屋から即座に飛び出していった。

私が用意し終わるとゼンが部屋に戻ってきた。

「ほら、食べる。」

「おお、おいしそう。  
いただきます。」

ゼンの言葉に早速いすに座って食べ始めた。

もぐもぐ、あゝ、おいしい。

「ルミー、お前、いつもバンダナつけてるのか？」

食事中にゼンが聞く。

「・・・ゴクン。うん、つけてるよー」

私は食べ物を飲み込んで答える。

「混血の印も手袋で隠してるんだな。」

「うん^」

私はゼンの言葉に頷く。

「・・・ごちそうさまでしたっと。  
じゃあ、いつてくるよ?」

私がそう言っていこうとすると、

「お前、急ぎすぎ」

と、言われ、腕をつかまれた。

「え?」

「自分の体調の悪さくらい、自覚しろよ?  
病み上がりって顔してるぜ?

だ・か・ら・な?」

ゼンが顔を近づけて言う。

「ん?」

私は首をかしげる。

「依頼終わったら帰ってこいよ？  
あっちの国より先に。」

ゼンは言う。

「先にこっちに帰ってくるのは当たり前だと思うけど？  
報告、こっちだし。・・・？」

私は、何が言いたいんだ？と言う風な目でゼンを見る。

「はあー」

ゼンは何故が大きいため息をする。

安堵したかのような・・・いや、あきれてるような・・・

ともかくそんなため息である。

「ああ、そうだな。報告はこっちだもんな。  
はあー。（再びため息）

ならいい。

じゃあ、いつてこい。」

ゼンは自分に言い聞かすように頷き、あきれたようにため息をついて言った。

「？・・・うん、いつてくるね^^」

私は変に頷きため息をつくゼンを不思議に思いながら言った。

「ああ」

ゼンは頷き、私を見送った。

ゼン、頷いたり、ため息ついたり・・・大変だなー

と、思いながら私は依頼先へと走っていった。

自分が　ゼンを大変にしてる　ことも気づいていないルミーでした。

そして、そのことに気づいて欲しいゼンでした。

## 第八話 事の成り行き（シン視点）

「プリンス、いい加減、お分かりになつてください。  
あなた様は何度、候補の方と会つてもそれを排除し  
だれひとり、婚約者を決めてはいないじゃないですか  
その女嫌い治して早く婚約者をお決めになつてください。」

側近の説教からシンの生活は変わった。

シンは生まれもって人々をひきつける容姿を持っていた。

それ故に、女はシンの外見に惹かれ、王女の座を狙った。

シンはそういう女ばかりと接してきたためか、女が存在自体を嫌悪  
していた。

それとともに、女はこういう奴なんだと思いこんでしまった。

「俺が見てきた女はたくさんいたが誰も最終的には同じだった。  
その中から決めろなんていわれても俺は承諾しないぞ、絶対に。  
だが・・・。」

だがな、側近。そこまでお前が婚約にこだわるなら、  
今まで、俺が接してきた奴とは違う奴を婚約候補として連れて来い。  
フン、そんな奴、そう簡単には見つからないだろうがな？」

側近の売り言葉にシンは買い言葉で言ってしまった。

「はい、分かりました。」

必ずお見つけいたしましょう。  
ですから、シン様、その言葉、お忘れなきように」

側近はにやりと笑い、自身ありげに言った。

その頃から側近は他国の姫を調べつくしていたのであった。

それを知らずに、シンは

「ああ、忘れない。この身に誓う。  
だから、必ずつれて来いよ？」

と、言い返す。

「はい、おおせのままに」

そう、側近はお辞儀と共に言い、にやりとまた笑ってその場を去った。

「・・・」

フン、そんな奴、いたらほんとに見てみたいものだ」

シンはひとりでに眩き執務を始めた。

そしてそれから一週間後。

あちこち他国を旅してきた側近がついに帰ってきた。

そしてそいつを見つけたという。

ほんとか？

と俺は始めに疑った。

側近はその候補を詳しく話した。

それに興味があつたから

「そこまで言うならつれて来い。  
俺が気に食わなかったら・・・分かつてるな？」

と、脅かし半分で答えた。

すると自身ありげに

「はい、存じております。  
では、早速つれてまいりますので・・・」

と、言つて側近はすぐに去つていった。

シンはそれを見送り、

側近がそれほど言う女・・・一体どういう奴なんだろうか？

と、興味半分。

女なんて誰でも同じさ、所詮、外見に皆は弱いのだ



そんな奴、みたくもない。

と、嫌悪半分。

興味と嫌悪という矛盾された二つの感情が入り交ざって

複雑な心境にシンはいた。

## 第八話 事の成り行き（シン視点）（後書き）

えとー、短くてすみません。

シンさんの、性格ってかなり書くのが難しいんですよ・・・。

ですからこの後の話もちよっと・・・なかなか作れなくてですね、過去編的なものに・・・。

いや、でも、次回からはしっかり書くんでその辺りは許してください。

では、また次回。

## 第九話 吸血鬼退治

私は城を出てすぐに森に入った。

人があまり通らない道はそこしかないからだ。

すたすたすた……

私は早歩きで歩く。

……尾行されてる……？

私はそう思った。

私と一定の距離を保って後ろに気配を隠している人がいた。

だが、誰かは分からない。

殺気はないからおそらく襲っては来ないだろう。

私は尾行に感づきながらも宗教都市と呼ばれる町に訪れた。

その町はまさに宗教だらけであった。

町の建物はほとんど教会のような形をかたどっている。

そして行き交う人々は神官のような格好をしている。

……ここが宗教都市……。

私はその呼び名に納得がいった。

私が町並みや人々の服装に怖気づきながらもその町の中へ入った。

道を私は普通に歩くと人々は私に視線を向けた。

「・・・」

私はそのことに気づかぬ振りをして歩こうとしたが・・・

目の前に青年が立ちふさがった。

「ねえ、君、ひょっとして依頼を受けてくれた人？」

青年は私に問いかける。

私は見上げた。

「・・・はい。そうですが・・・」

私はそう答えた。

青年は背が高く私と頭一個分以上身長差がある。

この人・・・感情を表に出さない・・・。

ふと、私は思った。

「君は今どこへ向かっているのかな？」

青年は微笑みながら問う。

何でこの人は聞くんのだ？

怪しい人、どうにも好きじゃないな、こういう人。

「どこって……。とりあえず宿……ですが……。？」

私は怪訝な顔をして答える。

青年は少し目を見開き

「……」

君は心を閉ざすのが上手いんだね

と、言う。

「あなたこそ」

私は即座に言い返した。

「あはは。

はじめていわれたよ、そんなこと。」

青年はお気楽そうに笑う。

「あなたは崇拝者ですか？」

私は青年に問いかける。

「崇拝者？・・・この服装見れば大体の人がそういうだろうね」

青年は苦笑いして答える。

青年の服装はまさに神官そのものだった。

「とりあえず私は私のやることがあるので、ではまた」

私は青年に背を向けて言った。

「あーごめんね。

引き止めちゃったりして。

じゃあ、またね、」

青年はにっこりと微笑み、去っていった・・・と思う。

私はそんな出会いと会話など気にも留めず宿に向かった。

その宿で荷物を置いた。

夕食を済まして借りた部屋で準備をし始めた。

移動中、腰に差していた剣を私は手に取った。

そして混血の証が刻まれている左手の手袋を外した。

剣を鞘から抜き、その切っ先を混血の証に向ける。

皮膚が傷つくか否かというところまで近づけ、呪文を唱えた。

「剣よ、混血なる血をもつてして、鞘私の身体におさまりたまえ」

私は短く詠唱する。

すると、

ヒュン！！

剣はそれにこたえたようにその場から消え去る。

すると、混血の証に奇妙な華が刻まれた。魔方阵

私はそれを確認すると銀の腕輪を両腕につけた。

そして魔力粉の入った小袋をベルトにくくりつけ、腰に杖を隠すように取り付ける。

「よしっ、準備完了」

私は呟き、宿を出た。

そして依頼を出した教会へ行った。

もう夜になっているせいか歩く人の姿は見当たらない。

もつとも、吸血鬼が出歩く中で夜中に平気でうろつく人（一般人）がいたら見てみたいが。

教会で吸血鬼がよく出る場所を聞いてみると

「吸血鬼は森によく出るんです。  
ちょうど漆黒の泉あたりです。

今は血の色に染まっていて真紅の泉ですが。」

と、こたえられた。

私はその泉に向かった。

昼間から尾行してくる人はまだ今も続行中である。

そして泉に到着した。

ここか・・・。

私は泉を見回してみた。

泉は小さく月に照らされ水面が輝く。

真紅とは程遠い輝きを放っていた。

「・・・」

私は辺りを見回した。

泉の周りを囲むようにして林で覆われている。

林は月に照らされ、影が地面にへばりつくような感じに濃く映し出



される。

ヒュッ

私の真上を通り抜けるような影が一瞬姿を現した。

私は真上を見上げた。

すると、影はいくつも姿を現し、ストンと地上に降り立った。

「吸血鬼・・・ね」

私は呟いた。

何匹もの吸血鬼たちはまるでお化けのように手を前に差し出しながら私に近づいてくる。

「血〜”があ〜ほ〜” しいいいい””」

「血〜ガ〜ホシイ〜」

「チヲクレエエエ」

吸血鬼たちは声を震わせて襲い掛かってきた。

・・・完全に理性の失った下級の吸血鬼たちだ・・・

私は心の中で呟きながらひらりひらりと吸血鬼の爪を避ける。

呪文を小さく唱えながら杖を取り出した。

そして一匹の吸血鬼に杖を突き出して

「炎の浄化」

と、言う。

ブウォン

すると、一匹の吸血鬼は炎を浴びた。

「ウ”ガアア”アツアア」

悲鳴を上げ、吸血鬼は灰と化した。

灰・・・それが吸血鬼の最後である。

私は吸血鬼たちを一掃するべく呪文詠唱して大技を叩き込む。

「雷の浄化」

私は天に杖を振りかざし唱える。

すると、

ダン”ダンドンダンドン”！！！！

と、音を立てて雷が吸血鬼たちに降りかかった。

「ルゲウォオオオ」

「グ” ガアアアッアア」

人ではない悲鳴をあげて吸血鬼たちはあっけない最後を迎えた。

皆が灰と化し、あたりは静まり返る。

ふうー

と、少し気を抜いたとき、

ガサツツ

と、背後に音がした。

慌てて振り向くとそこには…………。

「…終わったか？」

背後に現れた人が聞く。

「何で…ここにいるの？」

私は逆に聞いた。

## 第九話 吸血鬼退治（後書き）

途中でごめんなさい。

家の緒事情でしばらくは更新できないかもしれません。

なるべく早く更新しますのでどうか気長にお待ちいただければと思います。

・ ・ ほぼ、ファンタジーですね。恋愛はゆるゆると緩やかに進む  
と思います。

作者にもこれからのストーリーは分かりません。

どうか、ご承知ください。

## 第十話 姿は魔族、放つ気は神気

私は現れた人物を凝視した。

それは声からしても姿からしてもシンそのものだっただ。

「・・・」

お前が文を残して勝手に行くからだ」

シンはむっとしながら言う。

それ・・・理由になってない気が・・・。

「だからなんで？」

私は首をかしげて問う。

「・・・」

シンは急に黙りこくる。

心配・・・で、追ってきたの・・・??

「今のは追うきっかけみたいなものでしょ。  
追ってきた理由は何??」

私は聞く。

「お前は無茶をするからだ」

シンは私を見つめて言った。

それも理由になってないと思うけど・・・。

つまり、無茶するなっていう牽制だったわけ？

「無茶して欲しくないから尾行してたの??」

私は単刀直入に聞く。

「・・・」

シンが何か言おうとしたとき、私の背後に何か来た!!

「危ない!!」

私はその気配を感じ取り、すぐさまシンを風の軌道に乗せ、力任せに突き飛ばした。

ヒュー・・・ドガッ・・・ドテッ

シンは突き飛ばされ離れた所にある木に背中をぶつけた。

そしてそれと同時に私は大きな影に覆いかぶされ

がぶっ

っと、首筋をかまれた。

「っ!!」

血が吸われるのを感じて思わずうめく。

だが、されるがままの私ではない。

『私の鞘、今、剣を我が元に!!』

私は心の中でそう叫んだ。

ウ” ウォン!

手元に剣が召喚される。

ザシュッウウ!!

そしてその剣を握り締め私の首筋に牙を刺す奴をなぎ払った。

「くっ!?!」

相手はうめき数歩退いた。

「!!?!」

私は目を見開いた。

そこには昼間に会った青年の姿があったからだ。

「まさか・・・僕の牙を食らってうごけるとはね・・・」

青年は腹部を抑えて言った。

・・・吸血鬼だったのね!!

「あなた昼間の・・・」

私は青年を見つめて呟く。

「そつだよ、あれも僕さ」

青年は平然に言う。

私は吸血鬼の血筋を思い出した。

吸血鬼には二つの段階があったのだ。

ひとつは先ほど襲ってきた理性の失った血を求める下級の吸血鬼。

もう一つは青年のような理性があつて昼間も大丈夫な上級の吸血鬼。

だが・・・上級の吸血鬼も理性を失うことがあつたはずだが・・・。

「油断・・・した」

私は顔をゆがめて言う。

首筋から血が滴り落ち、体はしびれ始めてきた。

「!・・・美味しいね・・・君の血は・・・もっとチヨウダイ」



青年は目の色を変えていった。

・・理性を失った！！

青年は言ったと共に私に飛び掛ってきた。

私は剣を構える。

青年は冷気を放ちながら突進してきた。

ヒュウウファン・・シュー

冷気を剣で防いだ。

そして次の防御に転じようとしたが遅かった。

ドン！・・・ガシッ

私は胸元を突進され地面に倒れこむところを青年に腰をつかまれ首元に顔をうずめられた。

ペロリ

青年は私の首元をなめ上げた。

「ひっ！！」

私は体が一瞬震えた。

・・はなれなきやつ!!

私は剣を使ってもがいた。

「テイコウスルナ、ソソラレルー」

青年は言った。

いや、もはや青年は青年ではなくなっていた。

理性のあった上級の吸血鬼から理性の失った上級の吸血鬼となったのだ。

ガシッ・・・ブスッ

青年は片方の腕で私を縛り付け、剣の持つ腕に牙を刺した。

カランカラン

手に力が入らなくなり剣を地面に落としてしまう。

すると、青年は私をつかみ上げ首筋に食いかかってきた。

「ぐっ・・・くっ」ううう

足が浮き、つるし上げられる状態となった。

彼は私に圧力をかけてくる。

・・・ヤバイ・・・血が・・・

私は抵抗を試みたが体に力が入らなかった。

こうしている間にも青年は私の血をなめ上げていく。

ペローリ・・・ニユルニユル

「う”うう”」

体に突如異様な痛みが押し寄せてきた。

だが、次の瞬間、彼の圧力がなくなった。

ズゲツ・・・ズザアアツアア！！

彼は何者かに蹴り上げられたのだった。

彼の力がなくなり私の体は解放された。

そして私は地面に倒れこむはずだった。

だが、倒れこむことはなかった。

ガシッ

私は倒れこむ寸前誰かに腰を支えられたのだ。

青年は私から離れたところでうずくまっている。

私は支えてくれた者を見上げる。

月に照らされ、その者は姿を見せた。

その姿は異様で妖艶なものだった。

その姿に私は見覚えがあった。

「・・・アシュラ・・・!？」

私は思わず、凝視し、名を呟くように言った。

アシュラ・・・それはかつて自分が昔、対峙した奴だった。

「魔族っ!？」

シンが遠くから叫ぶ。

そう、まさに姿は魔族そのものだった。

人の姿だが耳はとんがってるし、目も蛇のような目つきで色は金色。顔つきも人の姿も格好よくてクールだが、髪は逆立ち頭には魔族の鎖がある。

そう、姿そのものは魔族だった。

だが、魔族が本来持っているはずのない気をその者には感じられた。

それが・・・神気。

字のごとく神の放つ神聖なる気。

それをその者は放つのだ。

この際はつきり言おう、そいつは神魔だ。

神族と魔族の間に生まれた混血の異存。異なる存在

私はそいつを昔、剣に封印したのだ。

本来、破られるはずのないもののはずだが・・・

「アシュラ・・・なんで・・・!!」

私は問いただす。

フンッ

混血の神魔・・・アシュラは鼻で笑い、続けざまに

「はっ、なにをほざくっ！俺様と互角で殺り合い、

しかも封印と契約までさせたお前が、

たかが理性の失った上級のウ”アンパイアなんぞにやられるとこなんて

誰が見てやるものかつ」

と、早口で言い募る。

「・・・!!」

私はその言葉に絶句する。

・ ・ 以前はこんなキャラじゃなかったような・ ・ ・

私は関係ないようなことを思う。

「この俺様とだぞっ！？俺様と！！

なのになんだ、このザマはっ！！

こんなザコに苦戦してんじゃねーよっ」

アシユラは姿にも似合わぬ口調で言う。

・ ・ ザコ・ ・ か・ ・

言われてみればそうである、魔族や神族にとっては。

「オォー~~~~シンキ・ ・ シンマ・ ・ ・ ホシィィ~~~~チヲクレェェ」

元青年・ ・ 理性のない吸血鬼が言い襲い掛かってきた。

「- - -」

アシユラは人間には発せぬ呪文を短く唱えた。

そして私を支える反対の手を相手にかざし炎で攻撃した。

ぼすっぼすっ・ ・ ブオオワァア

相手は炎に焼かれた。

「ル” ウウ” ウウウ」

相手は悲鳴を上げる。

だが・・・まだ立ち上がりゆっくり押した動きでこちらに歩み寄ってくる。

「チツ、しつこいザコだな」

アシユラはそう言い捨て数歩私を抱えて退く。

そのとき、私の首筋が熱くなった。

「っー」

移動の衝撃ですこし痛みが回ってきたのだろう。

私は小さくうめく。

そんな私を見て

「魔を滅<sup>デモンスレイヤー</sup>ぼせし者と呼ばれていても  
所詮、人間だな。モロすぎる」

と、アシユラは吐き捨てるように言う。

「チヲオオオ、チヲオオクレエエ」

理性のかけらもない吸血鬼はしつこく言って歩み寄る。

「ザコはザコでも上級だな。」

理性がないだけそれでもマシか。

厄介な奴だ、だが、この俺様には足元にも及ばない。」

アシユラは不敵な笑みを漏らし、

「塵と化せ、ザコがつー！」

と、言い捨て、手を振りかざし炎を何発も直撃させる。

ブォ”ウ”ン、ブォ”ン、ブォ”ウ”ン……！！！！！！！！

「グガアアツア！！！！！！！！」

吸血鬼は燃え上がり、最後には・

サラァー

と、灰・いや、塵と化せてしまったのだった。

シーン

吸血鬼が滅び、シーンと静まり返る。

「……魔族……なのか？」

シンが始めに沈黙を破った。

アシユラは声をするほうに視線を向けた。



「混血だよ・・・アシユラは」

私は呟くように言った。

「俺様は魔族だっ！人間の癖して何をほざくっ！？」

私の言葉にアシユラは不満げに言う。

「私は・・・人間じゃない。

・・・シン、あなたも・・・気を感じることができる・・・でしょ・・・？」

私はアシユラの問いにあっさりと言い放ち途切れ途切れに言う。

「っ！！」

アシユラは言葉を失い

「ああ、感じる。

そいつからは神気が漂っている」

シンは答える。

「アシユラは神魔だよ・・・」

そして・・・私の剣の半身でもある・・・と後に付け足して私は言った。

「剣の半身・・・？」

シンはその言葉に眉をひそめる。

「はっ、嘘だろっ!!? 第一お前は俺様を頼ってたか!？」

アシユラは叫ぶように問い詰める。

「頼ってない・・・

むしろ、あの頃のアシユラは私を・・・敵視してた」

私は今もねと付け足して言う。

「当たり前だろッ俺様の自由を奪ったのは紛れもなくお前だからな  
っ！」

アシユラは言った。

「自由・・・アシユラはあれを自由だと思ってたんだ・・・へえー・・・」

私は聞くような疑うような・・・そんな言い方をした。

「っ!??」

アシユラは黙りこくる。

封印する当時アシユラは町で暴れてた。

神気で満ちた自分を嫌になっただ、

自分が神魔だということを認めたくなかったからなのか、

それとも魔族として今まで生きてきたからか、

もしくは周囲の嫌悪が嫌だったからか、

どれにせよ、不満ばかりの感情で

うつぶんばらしに町にやつ当たりしてたことには間違いなかった。

「・・・あ、ああ、あの時は自由だったさ・・・なんでもいいようにできたからな。」

アシユラは焦ったように言い直して言う。

「まあ、それはともかく・・・私はそろそろ帰るから・・・」

私はそう言ってアシユラの腕から抜けようとした。

だが、アシユラは放さない。

「・・・放してよ・・・」

私は言う。

「はっ、動けないくせに強がる奴だな。」

アシユラは抱える腕に力を強く込めた。

「っー」

その力が強すぎて痛みを更に強くした。

「・・・」

はっ、もろい奴。

そんなんじゃ、さっきのザコどもにやられるなっ」

アシユラは私を鼻で笑う。

「っー何で放さない？」

私は聞く。

「お前、俺様をなめんなよ？」

アシユラは不敵な笑みで質問を回避しようとした。

「なめてない。」

自称、魔族・・・でしょ？じ・しょ・う。

だから何で放さない？

これくらい自力で動けるし。」

私は自称を強調して言う。

「自力でだとお！？雑魚にやられる奴が強がるなよ、クズがっ」

アシユラは鼻で笑う。

「・・・。クズ・・・ね、ひさしぶりに・・・きいたな・・・それ。

あ。シン、一人で帰ってよ？

私は一度宿に戻って報告とプラス、城で報告もあるから」

私はアシユラの言葉を聞き流してシンに言った。

「ああ」

「一ヶ月はあっちにいるから」

シンの頷きに私は再び言った。

「じゃあ、かえろう・・・」

「オイ」

私がアシュラの腕を解こうとしたらアシュラが止めた。

「ん？」

私は聞く。

「おまえ・・・クズって・・・。」

アシュラは言いにくそうに言う。

「その話はあとで。」

いいから放して？

私、まだ魔力はあるし。」

私はそう言ってアシュラの腕に力を込める。

「人間の魔力で何とかなるものかよっ」

アシュラは吐き捨てるように言う。

「だから・・・人間じゃないって。  
じゃあ、私、急ぐから」

私はそう言っで魔力粉を取り出し自分に振りかけた。

フワン・・・ホワン

魔力がみなぎる。

私は瞬時にアシュラから抜け出して飛んだ。

「なっ!？」

アシュラが驚いたような声を出す。

「シン、じゃあ、またね」

私はアシュラを無視し、シンにそう言っで振り返りもせず宿に向か  
って飛んだ。

**第十話 姿は魔族、放つ気は神気（後書き）**

次回はこの続きです。

今回も途中になってしまいました。すいません。  
でも、シンの一件は片付きました。

次回はアシュラ視点も混ぜてお送りします。

## 第十一話 無自覚な無茶、封印の過去

私は宿に戻り、宿のオーナーに依頼達成の報告を頼み、借りた部屋に戻った。

荷物をまとめて剣を手を持った。

先ほど泉においてきた破邪の剣だ。

あれは持ち主の元へ勝手に戻るという特殊な剣だ。

それ相応の代償はあるが。

・・・また・・・封印か・・・

そう呟きそうになるのを抑えながらアシュラのほうをみた。

「・・・」

アシュラは壁際に背をもたれさせながら腕を組み、私をにらむように見据えている。

・・・さまになっている・・・

腕を組むアシュラをみて私は呟きそうになった。

容姿がずば抜けてるせいかな、意外にもそういう体勢はけっこうカッコイイ。



性格を抜きにすればの話だが。

。。。

それはおいといて今は封印に集中しなければならない。

私はアシュラと向き合い剣をアシュラに突き出した。

「・・・また俺様を封印するきか、貴様」

アシュラは私に鋭い視線を刺し壁から離れた。

「。。。お前から貴様になつてる・・・」

不意にそう思った。

「当然するに決まってる。」

ほっとけば何をするかは分からない。」

私はそう言い放ち、魔力を手元に集中する。

「はっ、助けられていてよく言えたもんだ。  
この俺様がいたから今があるんだぞ？」

アシュラは私をあざ笑うかのように言う。

「じゃあ、助けたことを後悔すれば??？」

私は冷たく言い返し、呪文を唱え始める。

「なんだとおお!？」

アシユラは怒りの混ざった声を出す。

私はかまわずに詠唱し続ける。

ガシッ! ! ! . . . ドンッ . . . カラン . . .

「っー! ! ?」

私は一瞬何が起こったかわからなかった。

だが . . . 首からする鈍い痛みとたたきつけられた背中  
の痛みから今の状況を察することができた。

私は今、アシユラに首をつかまれ背中を壁にたたきつけられたのだ。

私の目の前には私をたたきつけたアシユラ本人がいる。

足元には手から落ちた剣がある。

「 . . . 」

本来なら呪文詠唱途中で攻撃されても迎撃できるはずなのだが . . .

アシユラは私を見つめ、噛まれたところを首をつかんだ手でわざと触れた。

そしてわざと力を加える。

「う”・・・」

言うまいと我慢したが体はそうもいつてはおれず、うめき声がもれてしまった。

「はっ、今で分かっただろ？」

貴様は俺様を封印できず抵抗もできないんだ。

貴様は今の自分を理解できているのか??」

アシユラは首をつかむ手の力を緩めて言う。

「理解・・・してるけど・・・?」

・・・今の自分?・・・アシユラは何を言っているの??  
・・・そんなの・・・自分が一番知っているのに・・・

私はそういう意味も含めて言う。

はぁー

普通なら誰もがそれを聞いてため息をするだろう。

シンもゼンもそういう反応を示したのだから。

だが・・・。

「!?!?・・・ったく、貴様、俺様を何だと思ってるッ!?!?  
俺様は魔族だぞッ!?!?

魔には過敏に反応をする俺様が気づかぬわけがないだろうッ!」

アシユラは逆切れした。

いや、キレた、というべきかもしれない。

・何に気づかないわけないって言っているんだろう?アシユラは。

「気づく??」

私は鸚鵡返しに聞く。

「しらばつくれるなああッ!」

貴様の体がどれだけ限界なのかは見れば分かることだろう!!  
それとも俺様をなめてんのかああ!」

アシユラは耳元で怒鳴り散らす。

限界??

そうでもない気がするけど。

それにナメてるって。。。思い込み激しすぎ。

「限界??・・・ナメる??別になめてなんかはいないけど・・・?」

私はいかにも不思議と言う口調で言う。

「くそッ、貴様は自覚もないのかッ!!」

とにかく、貴様は俺様を封印しようとするなッ!」

アシユラは叫ぶ。

「何で？」

私は聞く。

封印しないとまたアシユラはすき放題やらかすのに。

何かに縛られないと契約があってもうつぶんばらしになにかをこわすくせに。

そんな思いも込めて。

「いいから、封印するなッ!!」

とはいっても今の貴様はできないだろうがな。

それはいいが、もう貴様はあとはあの城に帰るだけだな?」

アシユラは諦め混じりに聞く。

「そうだけど・・・なんで聞くの??」

私は警戒心むき出しにして聞く。

「俺様が連れてってやるからだっ!!」

「!?!」

アシユラの意外な一言に私は自分の耳を疑った。

「フン、この俺様がお前を連れてってやるんだからな。感謝しろ」

アシユラは勝ち誇ったかのように言う。

どこが勝ち誇っているかは全く分からない私だが。

「誰も頼んでない。」

私は言う。

「ハアア！？俺様が、この俺様が運んでやるって言うてんのにまだ言うかつ！！」

運んでやるっていつてんだからおとなしく従って感謝しろッ！！」

アシユラはキレる。

「おとなしく従ういわれはない、あと感謝も」

私はアシユラの目を見て言い切る。

「！！！！？」

アシユラの眉はピクーンとはね上がり、続けざまに

「ああーもういい！！」

とにかくお前はもう黙ってろっ！！！！」

と、叫び散らし、私を強引に抱き上げた。

「なっ！？ちょー！？！！」

私はアシユラの意味不明な行動に頭と体がついていけなかった。

だが、体も心も拒絶していることは確か。

私は必死で抵抗する。

だが、アシユラは私を力任せに押さえつけ私の荷物をひょいっと魔力で持ち上げた。

「なっっー！？！どうする気！？」

パニックッ頭で何とか問う私。

「ハアア！？、決まりきったことを聞くんじゃねーよっ！馬鹿がッ」

アシユラはそう言つと

「――――」

人間の発せられぬ呪を唱えた。

すると、

グウ”オン”ンン・・・

と、鈍い音が発せられ、空間が歪んだ。

視界も歪み、体が不安定になる。

頭もカナヅチで殴られたように割れるような頭痛がした。

だが、それも一瞬のこと。

すぐに空間のゆがみはなくなって体は安定した。

だが、風景は部屋の風景ではなくなっている。

「ほおお、お前、そんな体でよく意識が保てたな？  
普通、今ので人間は少なからず失神するはずだが。」

アシユラは何か奇妙なものを見るような目で見る。

「ー人間じゃない

私はそう言いたかった。

だが、体が言うことを利かない。

体に力が入らなくなり何も考えられなくなりつつある。

「おいつ、どうしたっ!？」

アシユラが叫ぶ。

・ ・ ・まだ ・ ・ ・ 気を失っちゃだめだ ・ ・ ・  
・ ・ ・まだ ・ ・ ・ こいつに ・ ・ ・ 身を任せては ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・ ・ 意識だけは ・ ・ ・ 気を ・ ・ ・ 許しては ・ ・ ・ だめなのに ・ ・ ・  
・

私は最後まで歯を食いしばり自分の朦朧とする意識の中で抵抗した。

それを察したアシユラは、ふっと笑い



「強がるな。自分の体に身を任せろ。  
俺様を・・・俺を・・・信用しろ」

と、私に向けて言う。

優しい口調だが言葉は命令口調。

表情からして心から言ってくれてるんだと頭では理解しても私は信用できなかった。

最後の最後まで私は気を許しはしなかった。

私は抵抗しようもないいろいろなものに打撃を受けて意識を失った。

アシユラは最後まで自分に気を許そうとはしなかったルミィを見つめる。

・・・ここまで警戒されるとはな・・・

そう思いながら自分の腕の中にルミィを見ていた。

気を許してもらったことは簡単ではないことは自分でも分かっていた。

こんな性格だし、ルミーこいつに対していろいろと傷つけたりといった前科が以前にあったという過去もあった。

ルミーに対しての態度の変わりようは自分が封印されるまではなかった。

もつとも、封印されるまでは人を、いや、生きる存在もの全てを憎んでいた。（今も）

アシユラは封印される前のことを思い出していた。

アシユラは今まで魔族として生きてきた。

だが、いつの日からかその身に神気が溢れ、魔族の持つ邪悪な気、邪気を放つことはなくなり、かわりに神気が放たれるようになった。

本人の意識関係なく。

そのせいか、周りの魔族からは忌み嫌われ続け、魔族と対立関係にあり、世を統べる神族からも見放されていた。

そのせいか、アシユラは自分を蔑み心には不満や怒りが満ちるばかりであった。

その怒りや不満がついに町の人々に害をもたらした。

人々にやつ当たりすることによってアシユラは快感を覚えた。

快感を覚えるとそれはやめられなくなった。

そこで止めたのはルミーだった。

この頃のルミーはアシュラと同じ人々から蔑まれて生きてきた者であつた。

そのせいか、ルミーの言葉には棘があり、今以上に冷たかつた。

「あんたがいると人が死ぬからやめて」

ルミーがアシュラに言つた最初の言葉だった。

「フン、そんなこと知るかよ、俺がどうしようと俺の勝手だ」

このときのアシュラも自分のやりたい放題のことをしていた。

「じゃあ、私も勝手にやるから」

ルミーはそう言つていきなりアシュラに攻撃を仕掛けた。

「なつ、人間風情が俺にたてつくのかっ」

アシュラは攻撃されたことに驚く。

「私のすることはあなたが決めることじゃない」

ルミーは言いながらも攻撃を続けた。（このときのルミーはまだなりたての魔道士）

「フン、俺様に攻撃したことを後悔するがいい」

アシユラもそう言い反撃し始める。

その反撃した攻撃物でルミーはアシユラが神魔だということに気づく。

「神魔か。名前は？」

「アシユラ。アシユラ、シューティーン」

アシユラは不満にも自分の名前を素直に言った。

アシユラもルミーがどういう素性のものか分かったからだ。

そしてそこから果てしない闘いが続いた。

その闘いは命の取り合いだった。

両者ともども最後には瀕死状態に陥ったぐらいだ。

瀕死状態であるにもかかわらずアシユラには負けるはずがないと確信を持っていた。

一方、ルミーもアシユラは滅ぼせないと確信していた。

だからなのか、瀕死状態にもかかわらずルミーは破邪の剣を召喚した。

破邪の剣は別名、邪清の剣　とも呼ばれている。

邪を破る剣の意味はその字の意味も含め、  
邪を吸収し力に変えるという意味も含まれていた。

邪を清める剣は字の意味どおりで邪を清め、神気を強める剣でもあった。

その二つの名をもち、その剣には盟約の剣という剣本来の名があった。

盟約する者は剣自身が選ぶ。

そう、剣にも意思があったのだ。

その剣にルミィは何とか力を振り絞ってアシュラを封印した。

その後ルミィはしばらくの間、昏睡状態であったが。

アシュラはその封印を何度も解こうとした。

早く出たい一心で。

何故出られないのかとアシュラは自問自答していた。

そんなとき、アシュラの頭に直接声が聞こえたのだ。

――お前が邪悪な心を持っているうちはこの封印はとけないであろうと。

そしてそこからは  
アシュラと剣とで口げんかにも近い会話が長い年月の間繰り返されていった。

アシュラを剣に封印したルミィはしばらくの間剣を放置していた。

だが、ルミィはたびたび剣の刃を磨いていた。  
無表情でせつせと丁寧に磨いていく。

そのとき、剣を通してルミィの感情が入り込んできたのだ。

・  
――みんな、私が役に立つとわかるようになってから態度を変えた・

――前は私を避けていたのに・・・  
今度は何をたくらんでいるんだろう

――私はただ存在価値を否定しないで欲しいだけなのに、  
認めて欲しいだけなのに

――道具になんてされたくないのに

アシュラは入り込んできたルミィの感情に頭が混乱した。

封印される前に話した会話では  
こんな風な子供じみた態度をとってはいなかったはずだ。

いや、こいつはまだ子供だ。  
これが当たり前なのだろう。

だが、人に弱みを見せず毅然とした態度をとるほどこいつはどんな環境にいたのか・

けして、人に弱みを見せない。

けして、弱音をはかない。

けして、警戒心を怠らない。

けして、信用しない、気を抜かない。

その四つがこいつをしばっているのだろうか？

アシュラにはルミーが泣き叫んでいるようにしか思えなくなっていた。

そのときからアシュラがルミーに対する見方をかえはじめたのだ。

だが、時がたつにつれルミーの心までもが子供ではなくなった。

多少は子供のようなときもあったが。

そのことが気になりだしたアシュラに剣は言う。

――我が主、ルミーは心を病んでいる。

――お前も聞いているだろう？心の叫びを。

――本来、始めに聞いたような心の声が今の年齢と同じになるのだ。

――こういつてはなんだが、我が主はまだ子供なのに大人びすぎだ。

――主の境遇とお前の境遇は似ているな。

――お前の開き直りと主の凍結した心・・・それはまるで正反対だが・・・。

と。

剣自身も苦痛なのだ。

アシュラは剣の言葉とルミーの心の声に心を揺さぶられていたのだ。

まあ、悩んだ結果、こいつを助けたい一心で封印を破ったわけだが。

アシュラは昔を思い出しながら再び思うのだった。

・・・どうにかして、俺にでも警戒心は解いてもらわないとな・・・。

と。



第十一話 無自覚な無茶、封印の過去（後書き）

長くなりました。

## 第十二話 頭の回転の速さ＝冷静さ？

アシユラは異空間を渡ってルミーのいた城の門へと降り立った。

腕の中にいるルミーと門を交互に見つめてアシユラは立ちすくむ。

・んー、どうしたものか・・・

アシユラは考える。

ここで誰かを呼ぶのはおそらく簡単だが  
俺を見れば大抵の奴らが逃げるか攻撃するかどちらかなのは目に見えている。

それにどの臣下もルミーは信用してなさそうだし・・・

アシユラは悩んでいた。

そこへアシユラの神気に気づいてか、すぐさま門に駆けつけてきた人物がいた。

「あいつは・・・」

アシユラは駆けてくる人物の姿を見て思い出す。

・・剣を鞘ごともっていった奴だな・・・

と、思い出し、相手が来るまで待った。

「神気に気づいてきてみれば・・・封印されていたはずのアシユラが・・・なぜ・・・」

相手はアシユラの名を口にする。

その相手とはゼンだった。

ゼンはルミーに頼まれ剣を持ち出した人物であった。

「ほおお。貴様は俺様が分かるのか。  
確かに封印されていたがな。」

いや、それより、こいつのほうをー」

「ルミー！？何故気が半減しているっ！？  
いや、それよりも治療が先決だ！！」

「ー！！」

アシユラはゼンの言葉に圧倒された。

俺様の言葉をさえぎりやがって・・・

そっとう怒りもあつたが何より、  
ゼンの頭の回転の速さにアシユラは驚き怒りは収まった。

「アシユラ、悪いがルミーを運んでくれないか？  
ルミーがアシユラの腕の中にいるって事はルミーはアシユラを信用したんだろ？」

俺は医者と呼ぶから・・・ルミーの部屋は分かるよな？」

ゼンは早口にそう言う。

ルミーは俺様を信用したわけではないが・・・まあいい。

ゼンは心の中で戸惑い、だがそれも一瞬のこと、すぐに

「ああ」

と、アシュラはゼンの言葉に頷いた。

「じゃあ、頼む。」

ゼンはそう言って足早く去っていった。

アシュラはすぐに浮上しルミーの寝室へと移動した。

ヒュッ

魔族の力があればすぐに光と同じ速さで行くことは可能、すぐに着いた。

アシュラは魔力で寝室の扉を開ける。

寝室の中は大きなベットとクローゼットが一つずつあるだけのシンブルな部屋だった。

アシュラはルミーをベットに横たわらせた。

そして寝苦しくないようにマントを取り外す。

アシユラはルミィの荷物をベットの傍に置いた。

「・・・・・・」

アシユラはゼンと医者が来るまでの間ルミィを見つめていた。

寝顔は無防備で可愛らしいが顔色が悪い。

傷が進行してきているのが分かる。

ガタン！！

扉の開ける大きな音がした。

アシユラは振り向く。

医者はアシユラを見て目を見開いた。

そんな医者を見てゼンは

「ハル、アシユラのことは後だ！ルミィを早く！」

と、叫ぶ。

「は、はい！」

医者・・・ハルと呼ばれた者はすぐさまルミィの元へ駆け寄った。

アシユラは一步身を引いた。

ハルはルミーの診察をし始めた。

「ハルは女の医術師だ。

ハルなら問題はないはずだ。

男の医術師も惨敗だからな。だが・・・」

ゼンはそう誇らしげに言うが、最後は自信なさげなくもった声をだした。

「・・・」

アシュラはそれに対してゼンの言いたいことを察した。

それを察しアシュラは何も言わなかった。

「ルミー様は吸血鬼に噛まれましたね、上級の。

これは非常に危ないっ。

すぐに治療いたしますが、噛まれた箇所は二箇所あります。

ルミー様自身治療は可能なのですが・・・。

いや、それよりも後々熱が出ると思います。

私の力をもつてしても最小限に食い止めるのが限度です。

魔法薬をおつくりしなければ・・・。

とりあえず治療をします」

ハルは早口で要約して述べる。

すると、アシュラやゼンの言葉を待たずして呪文を唱え始めた。

それに圧倒されてアシュラとゼンはただ黙って見守るしかできなか

った。

ハルの手がルミーの首筋にかざされる。

すると淡い白い光が溢れ始める。

しばらくその状態が続いた。

そしてしばらくするとハルの呼吸が荒くなった。

ゼンが

「大丈夫か？」

と、ハルに聞く。

「は・・・はい。」

・・・もう少し頑張りますので・・・」

ハルは肩で呼吸をしながら言う。

アシユラは眉をひそめた。

ここは力で支配された国だ。信頼されて築いた王と民ではないはずだ。

なのに・・・どうして治療することを諦めない？

嫌々従っている者が重症だったらいいように手を抜いて次期王を待てばいいのに・・・。

アシュラは思う。

この者はルミーを少なからず敬っているのだろうか？

ルミーはけして人を頼ろうとはしないのに。

心を開こうとは思わないのに。

と。

ハルはその後腕の傷も治療した。

だが、どちらも完治まではいかない。

その証拠にルミーの顔色はますます悪くなり呼吸は浅くなりつつある。

「っ・・・」

ルミーさま・・・は、熱で・・・意識がありません。

薬を渡すので・・・水に溶かして・・・飲ませてください。

氷とタオ・・・ルを・・・用意・・・して・・・く・・・ださい。」

ハルは途切れ途切れに言い、薬をゼンに渡した。

「ああ、わかった。ありがとう、ハル。」

ゼンはそれを受け取りハルに手をかざした。

するとハルは魔力で一瞬包み込まれた。



「あ．．ありがとうございますっ、ゼン様。  
おかげで回復いたしました。

あ、ルミ様の傷．．吸血鬼の牙のことですが私も詳しくは知りません。

ただ、私のような医師者ではどうにもならないことが．．。」

ハルは最後、戸惑うような声で言った。

「．．。それは？」

ゼンは眉をひそめて聞く。

アシユラも眉をひそめて聞き入る。

**第十二話 頭の回転の速さ＝冷静さ？（後書き）**

途中になりました。

すみません。

あ、誤字脱字あったら報告ください。

あと、感想、評価お待ちしてます！！

### 第十三話 後遺症

「それは・・・上級の吸血鬼だけが持つ 牙の性質 なんです。」

ハルは戸惑いながらもはつきりと口にした。

「！！！！」

アシユラもゼンもその言葉に驚愕する。

「下級の吸血鬼に 噛まれただけ なら多少の貧血でおさまりますが、

上級の吸血鬼に噛まれたとなると・・・それだけではおさまりません。

それに・・・上級の吸血鬼には噛む際に 毒素 を相手に注ぎ込むことができるんです。」

ハルは続けて述べる。

「・・・毒素？」

ゼンが眉をひそめて聞く。

「はい、そうです。」

その毒素は私のような医師では到底消し去ることはできません。

毒素は 人の心を蝕む存在 ですから・・・。

そしてその毒素を注ぎ込まれた者は・・・吸血鬼に場所を知られます。

「

ハルは悔しそうに言う。

「吸血鬼に・・・場所を知られる・・・というのはどういうことだ？」

アシユラはハルに問う。

「え・・・」

えと・・・ですね。・・・吸血鬼は不死ですから体は滅ぼされても、精神体で地上に残るんです。

ですから・・・もし、ルミー様に牙を刺した吸血鬼がルミー様を望んでいるとしたら・・・

場所を知ることができ心に入り込むことができるんです。

毒素は・・・相手を知ることと、相手と疎通ができること・・・の二つの役割を持っているんです。

ですから、毒素は医術師には消し去ることができません。僧侶の方々ですら消し去ることはできないかもしれません・・・」

ハルはアシユラからの問いに驚き、間違えないよう言葉をつむぎだす。

「そうか・・・」

アシユラはそれを聞いて呟く。

「ハル、他に害はあるのか？」

ゼンがハルに問う。

「あ、もしものことです……、一つあるんです。ほんとにもしものですが……。」

ハルは言っているのかと迷いながらに言う。

「それは？」

ゼンは問う。

「吸血鬼の毒素は別名、牙の呪い……ともよばれていて……もしかしたら、あとあと、

ルミー様が強力な魔法を使ったりして多大な魔力を消費したりでもすると……

体に一時的な害を与えるかもしれない。

俗に言う後遺症……って言う奴の類なのですが……。」

ハルはゆっくりという。

「後遺症……」

ゼンが呟く。

「そう……後遺症です。」

吸血鬼は血だけではなく魔力も好みますから。毒素を通して味わっているのかもしれない。

先ほどはもしもといいましたがルミー様の場合二箇所牙が刺されましたから……

で、ですが、安静にしていれば、急に多大に魔力を消費しなければ

大丈夫ですから!!」

ハルは力強く最後は言い切った。

「ああ、くれぐれもルミーには安静にしてもらおうから・・・。  
ハル、ありがとう。君はよくやってくれた。あとは俺が何とかする  
から」

ゼンはハルに微笑んだ。

「もったいないお言葉ありがとうございます。  
何かあったら呼びくださいませ」

ハルはそう言って退室していった。

「・・・」

「・・・」

二人に沈黙が訪れる。

後遺症・・・後々それが出てくるならばルミーには大きな痛手だな・・・

アシュラはそう思いながらルミーを見つめた。

「アシュラ・・・しばらくルミーを見ててくれないか？  
俺は氷とタオルを持ってくるから」

アシュラにゼンは頼むような口調で言う。

言われなくても分かつてる。

そういう意味も含めてアシユラは頷いた。

ガタン

ゼンは頷いたアシユラをみて、すぐに退室していった。

アシユラは顔色が悪いルミーに近寄った。

近づくにつれて呼吸が聞こえてきた。

アシユラはルミーを覗き込むようにして見つめた。

・・・。

額を覆いかぶさるバンダナがある。

アシユラはそれをとったそのとき、

ビクッ

と、ルミーの体が震えた。そして顔も一瞬引きつった気がした。

「!?!」

アシユラは一瞬手を放した。

ぱんっ・・・

バンダナが床に落ちる。

だが、震えたのは一瞬だけだった。

そして何事もなかったかのように表情を戻した。

その一連をみて思わずアシユラはルミィの額に手を伸ばした。



### 第十三話 後遺症（後書き）

今回は短くなってしました。すみません・・

## 第十四話 異常な目覚め

アシュラの手の指先がルミーの額に触れるか触れないかのところでルミーはぱつと目を開けた！！

「!？」

アシュラは思わず手を引つ込める。

ルミーはガバツと上半身を起こした。

「・・・ハア・・・ハア・・・ハア」

上半身を起こしたルミーは息を乱していた。

顔は青ざめて汗もどつと噴き出していた。

「!?!」

アシュラは突然のことと言葉を失った。

「っ・・・!?!」

ルミーは顔を歪め、手で目をおさえる。

おそらくめまいがしたんだろう。

アシュラはルミーの背中を支える。

「無理はー」

「ここ・・・は・・・?？」

アシュラの声をさえぎりルミーが聞く。

っ・・・!!このやろーっ!!

俺様がせっかくせっかく心配してやってんの二なんだその態度はッ  
!!

アシュラはそういいたいのをぐっところえ

「オ、オマエの部屋だっっ」

と、言う。

だが、声は怒りで震えていた。

「ほ、ほんとにつれてきたんだ・・・」

ルミーは心底信用なさげに言った。

ルミーがいつもどおりならそれに対して何か言うであろっが今回は  
スルーだった。

「っっ・・・」

今の言葉でアシュラの怒りは落ち込みに変わった。

．．まだ信用してはくれないのか．．．（しゅん．．とする）

アシユラはそう呟きそうになるのをこらえた。

「．．．」

「．．．」

何故か二人には気まずい雰囲気が．．。

アシユラはじーっとルミーを見つめる。

だが、ルミーはボオーっとしていて気づかない。

頬が赤い。

おそらく熱が出始めたのだろう。

ルミーの瞳も虚ろでしっかり見えているのか多少気になった。

「ねえ．．」

「おまえ．．．」

二人の声が同時に響く。

「！！」

「！？」

そして二人同時に驚く。

「なっ、．．なんだ？」

アシユラは動揺を抑えながら聞く。．．抑えられてはいなかったが。

「そっち．．こそ．．なに？」

ルミーも負けじと言い返す。だが、表情は辛そうだ。

「オマエこそ．．何か言いたいんじゃないのか？」

アシユラはききかえず。

こうなるとお互い意地の張り合いだ。

アシユラはプライドが高いから自分から折れない。

ルミーも人に譲りだすと最後まで引かない。

こうなるといつこうに話が進まないのは目に見えている。

「そっちからいいよ．．」

「オマエからだ、早く言え」

と言うようなレベルの低い攻防が．．。

それが何度か続くとルミーのほうに限界が訪れた。

「くっっー」

ルミーの顔は見る見る真っ青になり、体がふらついた。

「オイッ！」

慌ててアシユラは抱きとめる。

アシユラの手がルミーの体に触れたー！。

なっ・・・！？・・・あつ熱いつ・・・！！

アシユラは目を見開いた。

「っー！。ハ・・・ア・・・ハア・・・っ」

ルミーは息を乱し、何かをこらえるように身を固める。

「オマエー！ー！？」

アシユラは言いかけようとして言葉を飲み込んだ。

ボヤーっ

と、ルミーの首筋から、腕から奇妙な光が溢れ出したのだ！！

すると、

「っー！！！？」

と、うめき、ルミィは耳を何故かふさいだ。

「!?!?」

アシユラはわけが分からぬまま、ただルミィを見つめることしかできなかった。

## 第十五話 吸血鬼の魂

『オォー、コヤツノチハスバラシィ〜ソソラレルウ〜』

ルミーの頭に、そして耳にその声が響いた。

自分を傷つけた吸血鬼ではない吸血鬼の声がした。

やつ・・・やめて・・・いや・・・ききたくない・・・

『コヤツノナカニハ』ワガアルジ 我が主ノ魂の欠片タマシイノカケラ”ガネムツテイル”

・・・いやだっ・・・ききたくない・・・

『モウイナイワガアルジ・・・ワレラノタメニクレタ』シフクノアジ 至福の味”・・・

『

『・・・ゾンブニアジワオウ・・・オォー、ナガレテクルコレハナ  
ンダ？サケビカ〜？』

・・・いやぁ・・・ヤメテ・・・ききたくない・・・ヨロコバセタクナイ・  
・誰かぁ・・・タスケテ・・・

『モットキキタイ・・・ソウダ、モット、ダ。ココロカラフルエロ、  
ソウダ。』

チヲ、ソシテ、ワレラニマリヨクヲ、ヒトトキノカイラクヲ・・・』

ルミーは耳だけでなく目もふさいだ。



「・・・いや・・・あげない・・・きかない・・・もう・・・やめて・・・っ  
ー」

心の叫びが思わず口から漏れる。

口から漏れ始めると後はもう早かった。

『ソウダ、ソウダ、コワガレ、コワガレ。ソノキョウフコソ、ワガ  
ノゾミ・・・』

チヲオーチヲクレエー、オイシイオイシイオマエノトヲオオ』

・・・モウイヤツ、キキタクナイっ・・・コワイッ・・・いやあああっ  
ああああ！！！！

「イヤッ・・・コワイイ・・・ヤメテッ・・・やめてええ、いやあああ  
あっっ」

「あげない・・・わたしたくない・・・コワイッ・・・ツヤ、いやああ  
あああ」

ルミーの心は崩壊寸前だった。

「おっ、おいっ！！どうしたっ！？」

アシュラが突然叫びだしたルミーに声をかけ、体をゆする。

「・・・いやっ・・・やめてえっっ！！いやあああ！！！！」

ルミーにはアシュラの声は届かない。

『ソウダ、サケビヲオオ、コエヲオオ、キカセロオオ』  
・・チヲオオーマリヨクヲオオーワレラ、ウ”アンパイア、ニ  
イイー』

・・いやっ、やめてっ、いやああっああ！！・・だれがあんた  
たちにつーっ

「いやああっ！吸血鬼っなんかに・・あげたくないっ・・わたし  
たくないっ・・」

「おいっ！しっかりしろっ！！俺様の声聞こえてるかッ！？俺様の  
声を聞けッ！！」

ルミーは叫ぶ。

アシユラも叫ぶ。

ルミーにはアシユラの声を聞いている余裕がない。

「くそっ！」

アシユラは言葉を吐き捨てるように言い、ルミーをぎゅっつと抱き  
しめた。

「やっ・・やめてっ・・いやああっああ・・あ・・・・・」

ルミーはなおも叫び続けるが途中で声がやみ始めた。

『・・ナッ・・ナナッ。ダレダッ、コイツハッ・・ワレラノジャマ  
ヲスルナッ

「・・・クソッ・・・コレデハムリダッ・・・チッ、マタクルカ・・・」

その声を最後にルミーには吸血鬼の音が聞こえなくなった。

「・・・キエタ・・・？聞こえなくなった・・・？・・・もう平気？？」

吸血鬼の音が聞こえなくなった後ルミーは徐々に落ち着きを取り戻していった。

「・・・！？」

ルミーは落ち着きを取り戻しようやく今の状況を把握することができた。

「・・・おいつ、大丈夫か？」

突然聞かれたその声にルミーはビクツと震えた。

肩、背中、顔・・・そのどれもに何らかの感触がした。

顔は相手の胸元でうずめられ、肩には相手の顔が、そして背中には相手の手がある。

「おいつ、聞こえるだろう？？俺様を無視すんなっ」

声からしても抱きしめる強さにしてもアシユラだっということが分かった。

「・・・だいじょうぶ・・・」

私は言った。

「ほんとか・・・？」

アシユラは私を放して額に手を当てた。

私は額に触れられた途端ビクツと震えた。

「・・・」

アシユラは少し顔をゆがめた。

「・・・？」

私はそのことに首をかしげると

「熱・・・」

と、アシユラは呟いた。

「え・・・」

私はアシユラを見上げた。

「熱・・・さっきより上がってるぞ。

何がだいじょうぶだあ？

ぜんぜん大丈夫じゃねえよ。

お前ら人間はもういくせに強がりだな。」

アシユラはそう言つと私の言葉を待たずにベットのの上に私を寝かせた。

「なっ・・・」

抵抗する間もなかった。

「・・・」

「・・・」

アシユラは私を上から見下ろす。

私はアシユラを下から見上げる。

だが、目の焦点が合わずさっきから視界は歪むばかりだった。

「っー」

「おーー」

私が顔を歪ませ、それにアシユラが何か言おうとすると

ガチャッ

と、扉が開く音がした。

「アシユラ、ルミィの調子は・・・って、ルミィ意識を取り戻したんだな」

そう言つて部屋に入つてきて私を見下ろしたのは紛れもなくゼンだった。

「ゼ．．ン．．．？」

私は歪んでいる視界の中に何か新しいものがよぎり、声で判断して聞いた。

「あ、ああ。ゼンだ．．．。

あの時は驚いた．．。

まさか、アシユラが．．お前を運んでくるとは、な。」

ゼンは何故か戸惑いながら言つた。

．．ゼン？

「あれは．．。

アシユラが．．ふう．．いん．．を．．破つて．．かつて．．に．．  
．！？」

私が言い訳を並べ立てようとするとゼンがいきなり私の頭を持ち上げた。

「っー！？」

視界が一変し空間が歪むように視界も歪んだ。  
目を開けているはずなのに何も見えなくなる。

だが、それも一瞬のことですぐに戻されたが頭のすぐ下に冷たい物があつた。

・ひんやり・・・する・・・氷枕？

「ルミー、大丈夫か？・・・悪いな、いきなりで。あまりにも熱っぽい表情してるから・・・つい体が勝手に。」

ゼンが詫びるように言った。

だが、私には声だけでゼン自身は見えない。

「・・・」

意識も朦朧としてて私が何も言えなくなると、

「・・・」

さつき、こいつの首筋と腕が光りだした。

そのとき、こいつ・・・取り乱したんだ。

・・・今はおさまっているが・・・

少し休ませたほうがいい・・・」

と、アシュラは言った。

・・・アシュラ・・・？

どうしてアシュラがそんなことを言っているのか私には分からなかった。

そして今、どんな表情で言っているのかも・・・

「・・・ああ、そうだな。」

・ルミィ、また来るから、今は休んでろよ？」

ゼンはアシュラの言葉に頷き、私に言った。

・二人とも・・・私を心配してくれてるんだ・・・。

コクン

私は頷いた。

「じゃあ、またくるからな」

そっいつてゼンはまた部屋を出て行った。

「・・・」

「・・・」

また、部屋の中はアシュラと私だけになってしまった。

「お前・・・俺様が見えているか？」

アシュラは私に静かに聞いた。



## 第十五話 吸血鬼の魂（後書き）

ちよつと気晴らしに書きました。

ずいぶん長いこと書いていなくてすみませんでした。

## 第十六話 神魔の復讐（前書き）

最初はルミィ視点ですが、途中からはアシユラ視点で書かれています。

## 第十六話 神魔の復讐

「・・・み・・・えて・・・ない・・・」

私はそう答えた。

実際、目の前は真っ暗。

すぐ傍にアシュラがいるんだろうけど、私にはその影すら分からなかった。

すぐ傍にいるものがアシュラだということは今の目の状態では分からない。

それを分からせるのは、神魔の気と声 だけだ。

「・・・なら、寝てろッ・・・!？」

アシュラは言った。

アシュラは城の外にある同じ神魔の気配に気づいた。

「わかつ・・・た。・・・ね。・・・る。・・・ね。・・・あ。・・・りが、と・・・う」

ルミーはアシュラに言う。

「あ、ああ・・・もう、しゃべるな、・・・目を閉じろ」

アシユラは言った。

だが、城の外にある者の気配に動揺し、言葉が突っかかる。

ルミーは言われたとおりあっさりと目を閉じる。

そして、すぐに眠りに着いた。

アシユラはすぐに、城の外へ向かった。

ヒュンツ・・・シュツシャツ

瞬間移動ですぐに城の外へ出る。

城には結界が防御の結界が幾重にも重ねられているが、城の主であるルミーが負傷の今、結界は弱く、気休め程度のものでしかなかった。

だから、神魔であるアシユラはすぐ突破することができた。

城にすんなり入れたときも今と同じ原理だ。

アシユラは城の真上を見上げた。

そこには、・・・アシユラと同じ神魔の気を放つ者がいたのだ！

アシユラはそこへすぐに向かい、

「誰だッ？」

と、聞いた。

「ようやくあらわれたな」

その者は名を名乗らなかった。

続けざまに

「もし、お前がここへ来るのが少しでも遅かったのなら  
ここを破壊しているところだった」

と、不敵に笑う。

「確かに。ここは今は無害だからな。

それよりも、何故俺を呼ぶ？」

アシユラは聞いた。

「僕の名は蛛陰<sup>シユイン</sup>。

下級魔族、神族、蜘蛛族、の血を生まれ引き継いだ混血の神魔だ」

その者は名乗った。

蛛陰は髪がエメラルド色で目が紺で、姿は人型だが、足や腕に奇妙な線が刻まれている。

背中には大きな繭が背負われていた。

・・蜘蛛族？・・・そういえば、そんな種族もいたな。

アシユラはああーそういえばっと思って思い出す。

蜘蛛族は、糸を自在に操り、念力といった能力を授かる種族だ。

「ほおう、で、その蛛陰さんとやらが何故俺を？」

アシユラは聞く。

「僕等神魔は種族の違うもの同士が成して生まれる存在、それゆえ、蔑まれて生きてきた。

見返したいと思わないか？」

そのためにこの世界のどこかに孤立して生きている神魔を集めているのだ。」

蛛陰は言った。

「見返すため・・・か。

そのために集め、どうするつもりだ？」

アシユラは問う。

「神魔はどの種族よりも優れている。

多勢で決起を起こせば、種族の頂点に君臨するだろう、

さすれば、あとは思いのままだ。

だが・・・僕等の数じゃ他の種族に長期戦を持ち込まれれば負けは確実。

そのために、今は数と力が必要だ。」

蛛陰は言った。

「数はさがすとして、力のほうは？」

アシュラは聞いた。

「僕等は人を食らいその力を得ることができる。  
人間は多いが弱い部類だ。

それでも食らう奴を選べば大きな力は得られるだろう。」

「・・・」

・・・人を食らう、だとお！？

アシュラは驚いた。

確かに自分を蔑んできた奴等には見返したいが、そのために人を食らうなどと・・・。

アシュラには迷いが生じていた。

それはルミーと共にいたためだった。

「だが、人間には稀に僕等にも取り込めぬ者がいる。  
その者は食らうことなどできないだろう」

蛛陰は言った。

・・・ルミー・・・のことかつ。

「それはあとで考えればいい。  
今は僕等だけの種族の国と数が優先だ。

・お前は どうする？  
僕等と復讐しないか？」

蛛陰はきいてきた。

「・・・ああ」

アシユラはとりあえず、頷いた。

ルミーのことがあつて少し戸惑いもしたが、復讐に比べれば、な。それに・・・まだ殺されなくてすむから、な。

「俺の名はアシユラだ」

アシユラは名乗った。

「お前なら頷くと思っていた。  
これからは“仲間”だ。  
よろしくな。」

蛛陰はそう言い、手を差し出した。

仲間・・・その言葉にアシユラは少しうれしくなって

「ああ、よろしくな」

と、言い返し、己の手を差し出し握手を交わした。

「拠点はもうある。  
だから次は仲間探しだ。」



手伝ってくれるか？」

「ああ」

蛛陰の言葉にアシユラは頷いた。

「僕は北を探す。

見つけたら気配で合図だ。

あと、いい人間見つけたら食べよ、力を蓄えなければ力が出ないかな。」

「・・・ああ。

俺は南を探す。」

アシユラは蛛陰の言葉に頷きながらそう言った。

ソシテ二人はそれぞれにちらばり同じ<sup>仲間</sup>同族を探しに行ったのだった。

## 第十六話 神魔の復讐（後書き）

あつ、お気に入り小説登録数が増えてる！？

このお話を読んでくれている皆様には感謝し切れません。

本当にありがとうございます。

本当にうれしいですッ。

思いつきで書いたこの話、書いててスランプにも陥ることがありましたが

皆様が読んでくれたという事実のおかげで励まされ立ち直ることができました。

これからもどうぞよろしくお願いします！！

## 第十七話 南の雲雀（前書き）

ここからはアシユラが冒険します。

ちよつとルミーちゃんはおやすみですっ

「主人公だけどべつにいいや」

「ハンツ俺様が主人公だー、はっはっはっ」

これが二人の温度差です。

## 第十七話 南の雲雀

アシュラは南のほうを飛んでいった。

長い間飛んでいるがいまだに同族の気配はしない。

・・疲れたな・・

そう思つてアシュラは近くの林に降り立った。

「!・・・」

「!!!?」

アシュラ八目を大きく見開いた。

近くに人間がいたのだ。

そいつはアシュラに気づき、腰が抜けたのかストーンとしりもちをつく。

「・・・・」

・・こいつの魔力・・欲しいな・・

不意にそう思う。

これは魔族の欲求なのだろう。

ルミの傍にいてもこれほど感じたことのない欲求が全身を駆け巡る。

まあ、もっとも、封印される前はその欲求に身を任せていたのだが・。

「っーーーー!!」

そいつはまだ幼い子供だった。

だが、秘められた魔力はとてもそそられた。

・・食べてしまえばらくなのだが・・

そう思ってそいつを見る。

するとそいつは目を潤ませ後ずさりをする。

「~~~~」

そんな顔されるとやろうにもやれないでいる。

人を食らうには二つの方法があつた。

己の魔力で生み出した攻撃で相手を倒し、  
気体に散らばった魔力を食らえばいい方法

相手の体を引き裂き、血を食らう方法。

二つ目はまるで吸血鬼だが、ようは魔力があれば何でもいいのだ。

アシユラはその後そいつとにらみ合いが続き、

アシユラは欲求に負けてそいつを食らった。

「・・・ウマイ」

口元をぬぐって呟いた。

この味を覚えると止められない。

それは分かりきったことだった。

その後も近くの村でアシユラは人を食らい続けた。

アシユラは人を食らうことで快感を覚え理性もなくなる寸前であった。

だが、その理性を取り戻させたのは・・・

目の前にいる少女だったりする。

「・・・」

「いやぁ・・・こないでえ!!」

少女は叫ぶ。

アシユラは近づき、はっとした。

・・・ルミー・・・

そう、アシユラはそこにいる少女とルミーが重なって見えたのだ。

アシユラは理性を取り戻し、辺りを見回した。

あたりは悲惨なことになっている。

村の家々は壊れ、あたりは血生臭く人の気配はもはやない。

この村も残りはこの少女のみになってしまったのだ。

少女の目から涙が溢れ、いやだいやだと死にたくないと嘆いている。

そんな弱い少女がなぜかアシユラにはルミーと重なって見えてしまったのだ。

ルミーは感情に乏しく、冷たく、涙を流すところなんて剣のときに数えるほど見た程度である。

そんなルミーと、この・・・泣き叫び死に怯える少女と、重なったのだ。

少女からは霊力と魔力の混沌の力を感じる。

食らえないわけではない。

食らおうと思えば食らえるのである。

アシユラの心には 「悪魔」 と 『天使』 がいた。

「ほらほら、おいしいだろう？くっちまえよっ」

悪魔がそそのかす。

「だめだっ、ルミーに合わす顔がねえだろう？」

天使が言う。

「いいじゃんか、もとは敵同士だ  
そんなことよりこいつはめったにいないレアモノだぜ？  
そついうのははやいもんがちなんだよっ」

悪魔がいろいろ並べ立てる。

「いくら前は敵同士だったからって今は違うだろ？  
剣になって反省したんじゃないのかよっ！ー」

天使が頑張っつて訴える。

悪魔と天使がアシユラの心を揺さぶる。

・・・俺は・・・俺は・・・っ



だが、アシユラは結局悪魔のささやきに乗ってしまった。

アシユラが少女に近づいていった。

「ひい”　いい”　」

少女は後ずさりをする。

そうそのときだった、

アシユラの前に何かが現れ少女の肩にトンツと手を置いたのは。

アシユラはそこで立ち止まる。

・ ・ 止めてくれた ・ ・

アシユラは救われたと思う。

アシユラは悩んでいる今、

本当に本心から少女を欲しいなんて思っていないかったのだから。

悪魔にささやかれただけであつて。

「僕の獲物に手を出さないでよネ？  
僕のお仲間君」

その者は俺に言った。

「 ・ ・ ・ ・ ・ 」

俺は一目見てこいつが仲間だと分かった。

そして理性も完全に取り戻した。

「・・・」

悪かった。一度味を覚えるとヤミツキになってしまうからな。助かった、礼を言う。」

俺は言った。

「ヒックッヒック〜、ひっ雲雀<sup>ひばり</sup>・・・」

少女はそいつを見上げしゃっくりを上げながらそいつの名を呼んだ。  
・と思う。

「ふんっ、分かればいい。」

これは僕のだって事が分かればネ」

そいつは言った。

「君・・・僕を探してたみたいだけど

・途中で食事なんかしちゃって道草くつてたけど  
僕に何の用？

あ、僕は雲雀。魔族、朱雀族、神族、の血を引き継いだ神魔だ。」

そいつは俺に嫌味っぽく言った。

・・まあ、そうだがな・・・

心のうちでそう思った。

雲雀は黒髪で少しクセツ毛、瞳の色も黒で、目元には十字架の黒い刺青がある。

ただ・・背中には翼が生えており、天使かと思うほどの両翼だが着こなしているのは黒いスーツ、手にはどの指もリングがはまっていて、

鎖がくくりつけてある。

そしてきれいな顔立ちに浮かぶ笑みは悪魔の笑み。

「俺はアシユだ。魔族と神族の混血・・神魔だ。雲雀を探してたのはだな・・復讐をしないかって誘いに来るためだ。まあ、もつとも俺も誘われた口だが・・。」

俺は言った。

「復讐？」

俺たちを蔑んだあいっらにっーていうやつなの？」

雲雀は聞く。

「ああ、そうだ」

俺は頷く。

「んーっ」

雲雀は少女のほづをチラッと見ながらなにやら考え始める。

少女は泣き腫らした目で見上げて雲雀を見る。

「ん、イイヨ。」

なにやら考えて雲雀は頷いた。

「そうか・・・ならー」

「ただし・・・」

「!？」

俺の声を雲雀はさえぎった。

「ただし、この子は誰にも食わせないから。  
それが条件。」

まあ、実際のところ助かったんだよね」

雲雀は言う。

「・・・何が？」

俺は問う。

「君が全部この村の奴を食事のオカズにしちゃってもういないから  
心置きなくこの子を連れ出せると思ったからネ。  
それにー、君にもいるようだしネ、獲物がネ」

雲雀はなにやらたくらんだ笑みを浮かべて言った。

「っーっー」

その言葉を聴いて俺にはなぜか、ルミィのことが頭に浮かんた。

「どうやらいるようだネ、この子を襲う前一度正気に戻ったみたいだったから

おそらく思って検討つけてたんだけどネ」

雲雀は言った。

「・・・ああ、いる。

じゃあ、交渉成立だな？」

「モチロン」

俺の言葉に雲雀は頷いた。

「あ、この子はルピナ。

霊術師と魔道士の間の子らしい。

ホラ、ルピナ、あいさつあいさつ」

雲雀は少女を促した。

「るっ・・・ルピナ・です」

少女は俺の目を見て言った。

さっきのような怯えは消えていた。

「ああ、俺はアシユラだ」

俺も改めて言った。

「で、これからどうするの?」

雲雀は聞いた。

「とりあえず一度、俺を誘った蛛陰のもとへいく。」

俺は言った。

「ああ、分かった。  
なら僕もついてく。

ルピナも抱えて持つてけばいいわけだからネ」

雲雀は言った。

「ああ、それでいい、いくぞ」

「オーケイっ」

俺の言葉に雲雀は頷きそして飛び立った。

蛛陰のいる場は北。

今と逆方向の中、二人は・・・いや、三人は向かうのだった。

## 第十八話 再び起きた暴走（前書き）

今回はルミーはでます。

シンはおやすみです。

「あ、でるんだ、って私、元気？」

「アシユラ登場以来出ていない俺は・・・いつまで、やすみだ？」

作者にきかれても・・・ネタバレしたら面白くないんで・・・。  
では、どうぞ。

## 第十八話 再び起きた暴走

ルミーは起きた。

さつきからあまり寝ていない気がする・・・。

そういえば・・・アシユラはどこにいったんだろう。

私は辺りを見回した。

薄暗い私の部屋には誰もいない。

・・・なんで私、アシユラを・・・探しているの？

自問自答したい気分になった。

とりあえず城には心配がない。

どこかへ行ったようだ。

あ・・・だれかこっちにくる・・・

ガチャッ

ドアの開く音がした。

「なんだ、起きていたのか、ルミー。  
具合はどうだ？

とりあえず薬持ってきたが・・・」



入ってきた人はゼンだった。

「大丈夫……。視界も良くなった」

私は答えて微笑んだ。

ゼンは私に近づいて私の額に手を伸ばす……。

ピタッ

ゼンの表情は真剣な表情から安堵した表情に変わっていった。

ゼン……。

「とりあえず熱は下がったな。

回復が早いな、意外と。

とりあえず、薬を飲め」

ゼンはそう言って私に差し出した。

私はこくと頷いて薬を飲んだ。

すると、そのあと、廊下のほうからはたと足音が聞こえてきた。  
そして気配もそれにそって部屋に近づいてくる。

「……？」

私は首をかしげる。

・・・なんで・・・こんなに慌てているんだろう・・・？

「ん？どうかしたか？ルミー・・・！？」

ゼンは私の表情を不思議に思っていていいかけた・・・が、すぐに気づいた。

ドタドターーーーガチャッ！！

「！？」

「大臣ッ！？何事だ！？

ルミーは体調不良なのに・・・無礼にもほどがあるぞ！！」

ゼンは入ってきた大臣にそう怒鳴った。

ゼンには悪いが・・・ゼンの怒鳴り声のほうが迷惑である・・・。

ルミルは内心そう思いながらも、

「私がかまわない。

大臣はそれを気にしてられないほどの問題が起きたんでしょで、どんなことがあったの？」

と、大臣に聞いた。

何か・・・胸騒ぎが・・・する・・・なんだろう？この嫌な予感・・・。

「は、はい。

先ほどの無礼はお許しください、ゼン様。

とてつもなく大きな大事件がおきたのです。

ルミル様もお体にお障りないよう聞いていただけたらと存じます。

その事件とは・・

国の中央であるこの城の真南の方角にある農村の村人がすべて消えました。

そして今、その真北にある農村の村人までもが消え去ろうとしています！！

村の建物は崩壊し、人も食い荒らされ、それはもう悲惨な状態であると聞いています！！」

大臣は言った。

真南と真北の村が滅ぼされた、と。

そして、その悲惨な状態を聞き、犯人は人ではないことが判定した。

「なんだって！？

ということとは・・・」

ゼンは驚いた、怒りを忘れるぐらいに・・。

「私を・・気配探知機である純白のクリスタルのある場所へつれてって！！

もしかしたら・・二年前のあの事件と同じかもしれない！」

私はそう言って、ベットから起き上がり、立ち上がった。

「なっーーーーー！！

まだ起き上がるなっ、もしそうだとしても、今のルミージャ無理だ！！」

ゼンはすかさず私を制する。

傍にいる大臣はその光景にあたふたする。

「二年前って・・・あの事件ですかッ!？」

大臣は目を見開いて驚く。

無理もない、私がアシュラを封印した事件のことと同じだといっているのだから。

「もう、平気だって。

無理だっと思うんならゼンも来ればいいでしょ。

それにアシュラは私にしか止められない。

まだ契約はしている。

近くにいれば封縛は可能よ。

だからはやく私をーっつれ・・・て・・・?」

ぎゅゅっ!!

最後、私は戸惑った。

ゼンがいきなり抱きしめてきたからだ。

「ゼ・・・ン・・・?」

私は聞いた。

「ルミーっ、俺はお前を失いたくないっ！

失いたくないんだっ！！

だから無茶はしないでくれッ！！

・・お前が・・王になるまで・・俺はお前が死んだんだと思ってた。

あの一族から追い払われ、差別されてきたお前は無力だった。

だから―――」

「・・死ぬわけじゃないじゃない。

混血を差別してたのは秘めている力を恐れただけのこと。

あのときも、無力じゃなかった。

それに、混血者だからこそ簡単に死ねないものよ・・。

だから大丈夫！

それに、今回はアシユラだけじゃないかも知れない。

それには純血であるゼンも必要だから、ね？」

私はゼンの言葉をさえぎり、ゼンの胸元を手で押した。

大臣にこんな姿見せたくない。

それが本心でもあったが・。

「・・・」

「頭、冷えた？」

「ああ・・」

「なら、さっそく私も準備するから、お二人は先にいっててね？」

私はそう言って、

ちよつちよつと・・・って抵抗する二人を追いつ出し支度をした。

着替えていつもの格好をし、バンダナもつけていろいろ魔法道具も身につける。

そして破邪の剣も、腰につけた。

すべて準備が整ったら部屋を出る。

ガチャ

あけたらすぐにゼンがいた。

「さつきは・・・悪かった。

つい感情的になって・・・」

ゼンは私から目をそらし何故か謝ってくれる。

「謝らないでよ。

それにうれしかったし。

自分の感情もある程度は大切にしないとね、  
じゃあ、いこう？」

私はそう言つて、マントを翻し歩き出す。

「体には・・・異常ないか？」

「うん、あの薬が効いている。  
平気だよ」

私は振り向きもせず答える。

「そうか、ならいい」

ゼンは安堵したかのように言う。

そして気配探知機であるクリスタルのある探索室に向かった。

そしてしばらくしないうちに着いた。

「大臣、どう？」

しばらく使っていなかったけど、調子のほうは「

「はい、大丈夫です。

これなら発動するでしょう。」

私の問いに大臣は答える。

「じゃあ、はじめるね」

私は言った。

探索室は、大きな部屋の中の中央にクリスタルがあり、それを中点とした魔法陣が床に組み込まれている。

そして一つの壁に方角ごとにその情景などを映し出すことができる。

私は意識を集中するために目をつぶり、手のひらに魔力を込めてク

リスタルに触れた。

そして同時にクリスタルを通して気配を探る。

「！！」

私は目を開けた。

私の手の上にゼンの手が触れたからだ。

「ルミーはあまり魔力を使わないほうがいい。消費しすぎると後が大変だからな」

ゼンはそう言っ続けて続きを促した。

ゼン・そんなに心配なんかしてくれて・・・

私は頷き、再び目を閉じて続きをし始めた。

そして北を探した。

「？」

私は眉をひそめる。

北にある農村から気配が感じず、  
西の方角から人のなくなる気配と人を殺める気配が見つかった。

「大臣、西を映し出して」



私はそう言ってクリスタルに魔力を込める。

「はい。……これはっ!!?」

大臣は映し出し驚愕した。

私も目を開け映し出されたものを見る。

「!!?」

「?!!」

私は目を見開いた。

なんと神魔は五人いたのだ!!

アシュラ……また同じ過ちを・

私はアシュラを見て思った。

## 第十九話 五人の神魔と三人の幸人（前書き）

さてさて登場人物も増えるのでみなさん、  
がんばってくださいーい

「増えるのか・・・俺の出番は？」

シン・・・君はまだオヤスミですっ！

「・・・」

シンが絶句しました・・・

そのかわりゼンもでる！出番があれだけど・・・

「すくないのか！？」

でも出れるのかぁー^^うれしいな！！出れない奴よりは、な」

ゼン・・・なんか棘のある言い方・・・シンかわいそう

「・・・」

シン・・・立ち直れていない。ぐさつと意外に深く傷ついたよう。

・・・ではどうぞー！

## 第十九話 五人の神魔と三人の幸人

「すぐに、西へ向かう、ゼン、いこう！  
大臣、留守番よろしく！」

私はアシュラの姿を見てすぐさま言った。

「ああ、あの瞬間移動装置をつかうぞ！」

ゼンは言った。

そして二人は急いで瞬間移動装置の場まで走り、作動させた。

ギギイイーーーーヴオオオオン”

装置が作動し一瞬で、あのスクリーンの移る場へついた。

シュタンッ！

そんな音を立ててその場に着地した。

少し遠いところにアシュラたちがいた。

「アシュラ！」

私は叫ぶ。

「!？」

アシユラたちは振り返った。

「・・・？」

私は振り返った者たちの中で二人の人間をみつけたー！。

一人は少女でもう一人は男の子である。

その一人の少女を抱きかかえているのは  
クセツケの黒髪で赤みがかかった翼を生やす神魔だった。

・・・朱雀族・・・の神魔・・・

私は眉をひそめ瞬時に考える。

朱雀族は南を司った有名な一族だったが・・・。

もう一人の男の子を抱きかかえるのは

金髪で長いストレートな髪を持ち、

目はまるで蛇のような目つきをしている神魔だった。

・・・こっちは・・・北を司る玄武族・・・

南の朱雀といい北の玄武まで・・・一体どういうこと???

「ルミィ・・・!？」

アシユラは驚いた。

まさかいきなり現れるなんて思いもしなかっただろう。

「アシユラ、君の幸人サチビトダヨネ？」

朱雀族の神魔がアシユラにきいた。

・・サチビト??

なにそれ・・きいたことない。

私は内心首をかしげる。

「・・・そうかもな・・」

アシユラは小さく曖昧に言った。

・・は？

そうかもってどういうこと？

私はもつと意味が分からなくなる。

「マジナシア王国の王よ、なんのためにここへきた？」

エメラルド色の髪・・深い海の色をした髪を持ち主が言った。  
背中に繭を背負っているから、おそらく蜘蛛族の神魔だろう。

「自分の国の人間を殺されて黙っていられるような  
志はもっていないから、私は。」

私は言った。

「・・・俺は補佐へ戻ったのかよっ・・・」

ゼンが小さくもらした。

「ほおう、いまだに体調は不完全なのに・・・か？」

蜘蛛族の神魔が私を試するような口調で問う。

「よく・・・知ってるね。」

体調は完全ではなくともなんとか痛手くらいは負わせられるでしょう？」

私は余裕かましてけんかを売る。

「フンッそれならまるで

貴女の体調が完全なら倒すことだって可能だといっているようでしかきこえないわねえ？」

玄武族の神魔が言う。

強気な声が返ってきた。

「五人っていうのはさすがにきついかもね、特に、玄武、朱雀、白虎、の三人には」

私は言った。

「あら、よくわかっているじゃない！  
人間ごときで私たち神魔と互角に渡り合えるなんてことは  
ありえないもの」

玄武族の神魔は機嫌のいい声を出す。

・人間じゃないけど・私

「あいにくと私は人間ではありませんのであしからず。」

私は言った。

ちよつとは皮肉を込めながらいえたかな？

「ふーん、ならまるで、

人間じゃないから互角に渡れるとおもってるのかしらあ？」

玄武族はそう言っ て私に問う。

「さあね、どう思うがあなた方の勝手だから。  
それはそうと、まだ人間食う気??」

私は聞いた。

人間の命・これが本題だ。

どうやったって闘いは逃れられないことを知ってはいるけど。

「人間がないと復讐できないからな。」

蜘蛛族の神魔が言った。

「復讐？」

神魔なら人間なんて無くとも復讐ぐらいできるんじゃない？」

私は言った。

「貴女のような強い人なら食べれないけど

他の人間は美味しいしなにより魔力はほしいから人間はひつようね」

玄武族の神魔が言った。

「そうー！。

どうしても、人間食べるのはやめないのね？」

私は聞いた。

身構えながら。

「ええ、そうよ。

じゃあ、私とまず、貴女とで闘いましょう？」

私、闘いダスキですよ。

じゃあ、蛛陰さん、雲雀さん、アシユラさん、白夜さん、  
私、あの人とやるから手出ししないでちょうだいね？」

玄武族の神魔は私に問い、他の神魔たちに言った。

「あれは俺のだ。<sup>ツタージャ</sup> 鳶蛇、俺にやらせろ」

アシユラは玄武族の神魔に言った。



アシユラ・・・俺の・・・になった覚えは私にはないけど？

私は複雑な思いでアシユラを見る。

「あら？アシユラさんの幸人なの？

意外だね。だけど、私は闘いたいわねえ。

あ、そうだ、貴女、こういうのはいかがかしら？」

鳶蛇と呼ばれた神魔はアシユラに言い、私に伺う。

「どうなの？」

私は聞いた。

「貴女と、その隣にいる人と、私とアシユラで2対2で闘いましょう？」

「ゼン・・・」

私は呟く。

「俺はいいぜ。

アシユラはせめて止めないとな」

ゼンは言った。

「ありがと、私もいいよ」

私は呟く。

「ならきまりね、久遠<sup>くおん</sup>、あなたはここにいてね」

鳶蛇と呼ばれた神魔は、抱えていた男の子を降ろした。

「・・・」

久遠と呼ばれた男の子は虚ろな眼をして鳶蛇を見ていた。

無表情で幼いけれど、どこかしらシンに似ているとおもった。

そして・・・闘いは始まった。

私は剣を片手に持ち、ビュウツツと風を相手に突きつける。

そこからバトルははじまったのだ。

ビュウウウ、シュッ

鳶蛇とアシユラは軽々と避ける。

その後ろにいた神魔も避けた・・・が男の子はそのままだ。

一体どうするかと思ったら・・・

ビュウウウウウウ・・・スッ

と紙一重で男の子は風をかわした。

かわしたときも眼は虚ろなままだった。

ゼンが・・

「炎よ!!」

魔力のみなぎる弓で矢を放った。

ヒュンツ!・・・ブオオオウワツアア””

放たれた矢がいくつもの矢となり炎をまとう。

シュンツシュンツシュンツ

たくさんの矢がアシユラたちを襲うが・・

軽々と避け始める。

私は

「魔の舞!!」

と、叫び、剣の舞を踊り始めた。

それとともに風がなびき、魔力が宙を螺旋する。

ビュウオオオオオオ””、キイイイン””

そして魔力が竜巻となって剣の周囲を巻き込み始める。

ゼンは私の傍にいるから影響を受けない。

それが鳶蛇を襲うが・

「蛇の芽吹き!!」

鳶蛇は一つの種を手のひらに乗せ、ふうーと息を吹きかける。

すると、

ズヴオオオオオオ””

種からたくさんの草花や枝が伸びていく。

そして竜巻を草花たちが捉えた。

ギギギイイイ”

と、草の軋みがきこえる。

・私のほうが・一枚上・

そう思った矢先に

「自然の力、戒めを解き放たれ!」

と、アシュラの声が聞こえた。

すると、草花の力がぎゅうぎゅうと強くなった。

ぎゅううーっ

竜巻は締め付けられる。

私はその隙にアシユラに剣を向けて切りにかかった。

ダダッ

私は走る。

アシユラは力を使う最中のため反応が一瞬遅れた！

その隙に剣でなぎ払う・・・が受け止められた。

ギッギギイ

剣がとなる。

やはり一度封縛したためか。

「アシユラ・何故、人を食らった？」

私は聞いた。

「っっっ！お前には関係ないっっ」

アシユラは顔を歪ませながら言った。

無理しているのだと私は思った。

私は一度離れ、距離をとった。

「関係は無いけど、アシユラは一度封印した。  
それがまた・・・ってことになるどこっちとしても困る。」

「っーっー」

私はそう言つと、アシユラは一瞬傷ついた表情を見せた。

・・・傷つくんだ。・・・そういわれると・・・。

アシユラはその一瞬だけ隙をつくった。

「悪魔の華!!」

私は闇色の花びらを矢のように鋭くさせ、アシユラに向かって舞わせる。

ヒュヒュッンッ!・・・シュシュッ・・・ザシュッ!

アシユラはまともに食らう。

「うぐっ」

アシユラはうめき、ばたつと倒れる。

「なっー!?!」

他の神魔たちは驚いた。

ただ、朱雀族の神魔だけは納得したような顔を浮かべる。

「アシユラ、何故、今、傷を受けたかわかってる??  
隙をみせたからよ。

本当に・・・アシユラハ・・・ツウ!？」

ザシュッ!!

私は言葉を続けようとしたとき背中に大きな衝撃を受けた。

おそらく鳶蛇に斬られたんだと思う。

「う” - - つ”」

背中に来る激痛とつずき始めた首筋と腕とで、私はうめき一瞬よろめく。

私が振り向くとゼンも傷を追っていた。

「アシユラさんばかりにゐてにしているからよっ」

鳶蛇は言った。

すねてるような喜んでいるようなそんな感じの笑みで。

私は身構えようとしたが・・・

ビュウウルウウウ”

風に吹き飛ばされ、ばたつと、アシユラの倒れた近くで倒れる。

「わたしはもつと闘いたいの、  
少しはやりがいのある相手がいたんだもの、  
もつとあそばせてくれない？」

鳶蛇はそういつて私を蹴り上げた。

「っー!!」

私はみぞおちに蹴りを食らい、転がった。

「ル・・・ルミ・・・っ」

弱弱しいアシユラの声が聞こえる。

・・・私の名を呼ぶ資格なんてアシユラにあるのかな？

致命傷を受けたのに私はいたって冷静だった。

「アシユラさん、幸人が愛しい？  
でも、あなたはそれを裏切ったんでしょ？」

鳶蛇は言う。

「~~~~」



アシユラは押し黙る。

「アシユラさん、幸人は神魔にはひつようなものだろうけど、私はここでやめるわけにはいかないわ、それにとめられないー！ーっ!?」

鳶蛇は弱者を見下すような感じで私を見つめアシユラに言った。

その瞬間、私は起き上がり、剣で鳶蛇を炎でなぎ払った。

ブヴォオオウウワアアアアア”

「う”ううう”””」

鳶蛇は傷を負ったあと、後ろに退いた。

「ア・・・シユラ・・・は封印する・・・罪の無い人間は殺させない・・・」

私はそう言つてアシユラに剣を向け封印の呪文を唱え始めた。

契約はしたからあとは封印呪文だけである。

「なーっ!?」

鳶蛇は目を見開き攻撃を仕掛けた!

ズシャッ・・・ダンッ!

その攻撃をゼンがはじき返す。

「邪魔は・・・させないーっ!」

ゼンは叫び、鳶蛇を足止めする。

「神魔アシユラ、契約の名の下、剣に身を戒めんとする。  
汝の力、我の片割れとなりて、力を尽くせ」

私は呪文を唱え終わりアシユラを封印した。

ヒュウウーーーーーッ・・・・・・・・!

「~~~~っ!」

アシユラは一瞬、起き上がろうとしたがそのまま剣へと封印された。

「!!!?」

神魔たちは驚いていた。

無理も無いだろう。

体調不良だと言う少女に易々と封印されてしまったのだから。

だが、今回はアシユラの戸惑いが無ければ負けていたはずである。

「今・・・おもいついたのだけど・・・きいていい?」

私は剣をおさめ神魔たちにたずねる。

「な・・・なにをいまさら貴女は・・・っ!!」

鳶蛇は目を見開いたまま激怒しようとする。

“混血なる我が血よ、我に力を”

私は痛みにも耐えながらも混血の力を使う。

使わなければ一行に話は進まないだろうから。

「人間を主食として食らうわけじゃないよね？」

私は聞いた。

「なぜ、そのようなことを聞く？」

蜘蛛族の神魔が聞いた。

「人間を無差別に食べるほど困っているのなら

こちらとしてもまた今みたいに闘わなければならないのだけど、もし、そこまで困っていないのなら、少しでもかまわないなら、交渉したいなあーと思ったの」

私はそういつついろいろ考えながらも

「人間以外に他の魔獣とかも食べるでしょう？」

と、私は続けざまに聞いた。

「ああ、食らう。」

だが、魔の獣どもは有毒なものもあるからあまり食べない。  
まあ、人間よりは力になりうるが。」

蜘蛛族の神魔は言った。

「なら、交渉したい。」

魔の獣の毒なら私の魔法で浄化は可能だから。  
それと、もう一つ聞きたい。

人間を食らうのは復讐のためだけなの??」

「ああ、そうだ。」

基本、空腹には神魔はならない。

だが、力を強くするにはどうしても何かを食らう必要がある。  
復讐には数的には少なすぎる。

だから復讐のために人間を食らうのだ」

私の問いに蜘蛛族の神魔は頷いた。

「なら、私の手助けをしてくれないかな?  
いわゆる交渉ってやつだけだ。」

私は問う。

「何故、交渉したがる?」

私は返された問いに

「復讐――その言葉をきいたら懐かしくなったから。  
私も一族に一度しようとおもったことがあったからね。」

だからつてのと、これ以上無駄な犠牲者と、戦いは増やしたくない。それが本音かな」

と、正直に言った。

犠牲者を増やしたくないつてのは国の政治をやる上での考えだ。

復讐の手伝いをしたいつてのは本音だ。

「・・・交渉の内容は？」

そう、聞いてきた。

どうやら少しは聞いてくれるらしい。

「人間がほしいというなら

あなた方神魔に死刑の裁判を下された人をあげる。

そして、毒を抜いて欲しいなら毒を抜いてあげるよ。

それと、こっちのほうは・・・いろいろな害獣駆除を頼みたい。

それなら力を蓄えるエサにも害獣はあてはまるでしょ。

それ以外にも・・・そうねえ、もし、戦争にでもなったら出てもらいたいな。

あーそれと、そこにいる人間の二人はこちらで預かってもいいよ。

復讐にもできるだけ手伝ってあげるよ

それが条件」

私は言った。

「それだと、こちらのメリットのほうがおおいきがするが?」

そう聞いてきた。

「そうでもないよ。

戦争であなた方神魔が前線で戦うならあつという間に相手の兵は消え去るし

害獣駆除の面でもあなた方は強いから私は行かなくてすむし人を食らってもらえば、燃やしたり埋めたりしなくてもすむでしょ?」

私は淡々とこちらのメリットを述べる。

「どう?交渉する気になった?」

私は聞く。

すると・・

神魔たちは話し合い始めた。

「どうする?

あちらの交渉に乗るか?」

「ルピナの預かり場所があるならうれしいネ。  
いいよ、僕は賛成」

「私も久遠を預かってくれるなら

それでいて復讐ができるなら賛成ね」

「俺も、それでいい。」

騒がれるのは面倒だからな」

皆、異論は無いようだ。

「こちらは決まった。  
交渉にのろう。」

「じゃあ、決まりね。」

よろしく、えーと、名前は――」

私が聞こうとしたとき、

「蛛陰だ」

と、蜘蛛族で髪がエメラルド色をした神魔が言って

「雲雀ダヨ、っでこっちはルピナ。」

と、朱雀族で少女を抱えた神魔が言い

「鳶蛇よ、っでこの子は久遠」

と、玄武族の神魔が黒髪で瞳が藍色の男の子の名も言い

「白夜だ」

と、白虎族の神魔が言った。

「蛛陰に雲雀にルピナに蔦蛇に久遠に白夜、よろしくね  
私はルミー、こっちはゼンだから、あらためてよろしく」

私はゼンに駆け寄ってゼンを支えながら言った。

ゼンは・・

「まったく、すごい思いつきをするぜ、  
そんなにシンの国に対抗したいかよ・・」

まあ、いいけどな・・。  
神魔さんたち、よろしくな。」

と、ぶつぶつ呟きながら言った。

「じゃあ、とりあえず、城に帰っている話そうか。  
蛛陰たちも城へ入れるようにもしたいからね。  
蛛陰たちもそれでいい？」

私が聞くとみんなは頷いた。

「じゃあ、アシユラの力も借りて瞬間移動するから  
少し補助お願いね」

私はそう言つと剣を抜いた。

「アシユラは・・封印をやぶれるのか？」

白夜は私に聞いてきた。



「うん、破れるよ。」

今は無理だろうけどね。  
以前やぶられたから」

私はそう言っ、そのあとみんなを手招きした。

「アシュラ、聞こえる？」

ということで話がまとまったんで、とりあえず、力を貸してもらおうから」

私は剣の中にいるアシュラに言っ、剣へと集中した。

そして・・・ヒューーシュータンッ

と、城に着いたのだった。

「あ、大臣」

私は呟く。

さて・・・事情説明が大変だな・・・

「ル、ルミー様！！それにゼン様も！！  
あ”” 後ろにいる方たちは・・・！！？」

大臣は目を見開き驚いている。

「静かに聴いてよ、大臣。」

この神魔たちは私の交渉に乗ってくれたから。

とりあえず、人型だから助っ人つてことで城の者に伝えてくれる？

城の出入りを自由にして欲しいから門番にも報告して欲しい

そういうことで、いい？」

「はっはいつ。

わ、分かりました。

スグニ・・伝達シテ、マイリマス」

そのあと、大臣は足や手が拳動不審になっていたがなんとか走っていった。

「ということで、とりあえず神魔だということは隠しておいてほしい」

「わかった・・」

私の言葉に蛛陰たちはうなずいた。

こうして私と神魔たちの交渉は成立したのであった。

第十九話 五人の神魔と三人の幸人（後書き）

長くなりました。

少しかけなくなっていた分頑張りました。

これからも頑張って生きたいと思います。

なんかファンタジーって感じですね。

バトルがはいっちゃったし・・・これで恋愛大丈夫かな・・・

作者も心配なきょうこのごろ。

## 第二十話 無茶と行動

私は神魔たちを城に入れ、客を招きいれる一室に招き入れた。

「・・・とりあえず、ここで話をまとめようか」

私は皆を見回して言った。

神魔は軽く頷いた。

「まず、契約条件からね」

私は、そう言つてアシユラの封印された剣を手につ。

「貴方たちは、人と獣の力が欲しい。

でも、私たちは罪の無い人を殺したくない。

そのため、死刑罪を下された人間と人間を害する獣を与える。  
これでいい？」

私は聞いた。

「ああ」

蛛陰たちは頷いた。

「これでいいね。

じゃあ、もう一つ、

これは私としての私情だけど、

貴方たちの復讐に手を貸す代わりに

私の敵国との戦争に出て欲しいの」

私は言った。

いつ、シンたちの国とやれてもいいように  
準備だけはしなければならない。

それに・・

シンがたとえ私を受け入れてもその国の貴族は認めないだろうから。

「あの国と戦争する気が!？」

ゼンが声を張り上げる。

あの国・・というのはシンのいる国だろう。

「今はともかく、あとあとそうなる気がするの。  
私としてもあそこへと嫁ぎたいわけじゃないし、ね」

私はゼンに言った。

脅されてと嫁ぐなんてまっぴらなもの。

「で、蛛陰たちは？」

「――」

蛛陰たちは互いに顔をあわせ・・

「復讐に手を貸してくれるなら  
戦争にも手をかそう。」

それに敵国の戦争相手は自由にしているのだろうか?」

蛛陰たちは企みの笑みを浮かべていった。

「あくまで戦争の兵とか魔道士とかだけどね。それなら許すよ。」

あと、城の出入りも自由だからいつでも仲間を探しにいつでもいいし、

連絡なら、契約の証にする クリスタル を使えばいいから、ね。

今からでも契約する?」

私は苦笑して言って契約を勧めた。

今、私は負傷しているし

あまりそういった契約はあとで大変なんだけど、ね。

心の中でも苦笑していると

不意に背後に殺気が沸いた。

ヒュッ

私は瞬時にしゃがむ。

スツと何かのからぶる音がした。

私への攻撃が失敗したのだ。

「・・・・」

そのあとの追撃は来ない。

私は警戒しながら立ち上がり後ろに振り返った。

「なっ・・・」

ゼンは目を見開いて

自分がからぶったことへの後悔を抱く。

「ゼン、殺気が駄々漏れしてた。

それじゃあ、今の私も気づくから。

それと、私の邪魔はしないで」

私はそう冷たく言い放った。

ゼンが私に攻撃・・・といった時点で

驚くべきことかもしれないが私はゼンのことを知っている。

私を心配してくれることも。

今回もおそらく私のためにしようとしてくれたことも。

無茶されるのを黙ってみていられないことも。

そんなことを知っていて

この仕打ちはひどいのだと思うかもしれないけど  
今、気を失うつもりは一ミリも無い。

「ッ」。

・・・悪かった。

だが、契約の前に傷は治してくれ。」

ゼンは私に願った。

ゼンは耐えられないのだといっている。

私は背中に重症を負っている。

それなのに契約するなんて無茶にもほどがあると。

「ダメ、契約は先のほうがいい。

時間が無いから。

傷は持ち堪えられるから。

心配してくれるのは分かるけど

全部終わればしっかり治療するから」

私は言った。

怪我を負わせた張本人の蔦蛇が・

「背中への傷は、この私がつけたものよ！

人によるけど毒だつて出る可能性があるわ！

はやく治しなさいな！！」

と、訴える。

「毒ぐらい、吸血鬼の牙よりは大丈夫だつて。

そういうなら早く契約を終わらせよう。

あなたの方だつて早くして欲しいでしょ。

だからそっちが先。

私は大丈夫だから。

まずはアシュラの封印を弱めるね」



私はそう言ってアシュラの封印を弱めた。

自ら封印を解く事はできない。

剣はアシュラを欲しているから。

私の力と剣とでは今の私では勝ち目が無い。

剣の意に反することは主である今の私にはできないのだ。

シューッ

私が封印を弱めるとすぐさまアシュラは封印を破った。

「オイッ、貴様ッ!!」

契約のほうが先だとかなに馬鹿げてること言ってるんだあ!?  
俺様がおとなしくしてるからって調子乗りやがって!!  
すぐに治せ!!」

アシュラはすぐさま私の首根っこをつかんで怒鳴り散らす。

「・・・」

一息で言うものだから部屋にいる全員が啞然としている。  
私以外の。

「なにいつてるの?  
ばかげてないし、それ。  
調子に乗ってもいないよ。」

それにこうやってることじたい時間の無駄だって放してよ、アシユラ」

私は冷たく言った。

そういうと、

ゴッゴゴゴゴ

アシユラの怒りは頂点に達した。

このあと――

「おいっ、いい加減にしろよっ!!

自分でも無茶だつてことが分かつてるくせに

なんでそこまで意地はるんだあ!?

そんなにそこまで言うんならなあ!!強硬手段だ!!」

アシユラはそう言って私を壁に押さえつけた。

「なっ・・・!!!?!」

私は押さえつけられ驚く。

「おい、白夜、こいつを眠らせろ」

「わかった」

アシユラは白夜に言い、白夜もそれに応えた。

ちょ・・・ちょっと、

なんでこんなことされなきゃいけないのっ・・・

「っー！」

壁に傷が当たり苦痛を顔に出さずに入られなかった。

「我慢できないじゃないか!!

だから俺もゼンも鳶蛇も言っているんだ!!」

アシュラが叫ぶ。

するとーー

ピー・・・

笛の音が聞こえてきた。

「あ・・・」

視界の隅で白夜が笛を吹いているのが見える。

滑らかで繊細な笛の音は私を眠りへと導くものだった。

・・・ね・・・ねむい・・・

・・・これは・・・なんの・・・旋律・・・？

私は抵抗できなくなった。

がくん”

体から力が抜けた。

ずっとアシユラがそれを支える。

「治療している間は・・・おきるなよ」

ゼンが私を見下ろしていった。

私は・・・それを最後に眠りへと落ちていった。

## 第二十話 無茶と行動（後書き）

みなさん、お久しぶりです。

これからも地道に進めようと思います。  
では。

## 第二十一話 契約・魔道士・侍女

「う”」

私は痛みで目を覚ました。

「痛むのか？」

そうやって聞くのはゼンだった。

視界には気を失う前に見た者ばかり。

「・・・べつに」

私はそういつて上半身を起き上がらせる。

そして・・・背中にあつたはずの傷を触る。

・・・。

ちょっと腫れてるけど傷は完全にふさがっていた。

「完治してるはずだが・・・大丈夫か？」

アシュラが問う。

「大丈夫。

それより・・・あれから――」

「あれからお前の治療に専念した。あれからそんなになつてはいない。お前は催眠にかかりにくいんだな。」

アシユラが静かに言った。

「・・・魔道士だから、当然でしょ。じゃあ、契約をはじめようか」

私はそう言つて立ち上がった。

「お、おいっ!!  
ルミっ!!」

後にしてくれ、体力も魔力も回復して無いだろ!？」

ゼンが私を抑えようとした。

でも、無駄。

スーッ

私は指で魔円を描く。

「ハッ!!」

気を吹き飛ばし、ゼンとアシユラをその円に封じ込める。

「なっー!!?」

ゼンもアシユラも身動きの取れない状況に陥った。

「じゃあ、蛛陰たち、契約やろうね？」

相手に有無を言わせない私の言葉。

「・・・」

相手は渋々頷いてくれた。

「・・・あれ？」

私の魔道具が・・・。

意識の無いうちに取り上げたね？ゼン」

私はゼンたちのほうを向いていった。

「- - - ! !」

ガンガンッ”

結界をたたく音がする。

ゼンたちに私の声は聞こえるが、ゼンたちの声は聞こえない。

そういう仕組みにしてある。

「・・・ちょっとまってね」

私はそう言って、魔道具を探し始めた。

探し始めてまもなくそれは見つかった。



「・・・隠すの下手だね、アシュラ」

私は呟いた。

取り上げたのはゼンだと分かったが  
おいた場所を見るとアシュラの仕業のようだった。

私は魔道具を身に着ける。

耳にピアス、腰のベルトには宝玉。  
腕にはブレスレット、そして手袋。

全てを用意して、そのあと、蛛陰たちと向かい合い、  
契約を始める。

「・・・」

私は呪文を唱え、手のひらに魔力を集める。

そして、魔力はクリスタルに変化した。

クリスタルは全部で四つ。

ヒュンッ

四つのクリスタルを私は浮かばせた。

「蛛陰、雲雀、鳶蛇、白夜、我と契約を交わす。  
汝等の名を、クリスタルに今、刻まん。」

契約の証、今ここに在る」

私はゆっくりと契約の呪文を唱え、クリスタルに名を刻んだ。

ヴァンヴァン”

名を刻むと同時にクリスタルは色を変えた。

蛛陰は紫、雲雀は紅、鳶蛇は深緑、白夜は白銀。

そして、クリスタルは契約の下、本人に渡された。

「これで契約は完了。

あとは仲間探してもどうぞ。

・ ・ ・じゃあ、ルピナちゃんと久遠君のことで  
いろいろと決めようか」

私は言つて、ゼンたちの魔円を解いた。

「とりあえず、使つ部屋に案内するよ。ついてきて。

・ ・ 私の部屋の向かいがいいかな ・ ・ 」

最後は独り言のように呟いた。

そして部屋を出る。

そして案内。

長い廊下を突き進み、私の私室の向かいの部屋まで来た。

その部屋は今は空きとなっている。

「ここでいいかな？」

あと、この隣も空いてるから。

じゃあ、入ってみようか」

私は言って私室の向かいの部屋に入る。

みんなも入った。

中は普通。

質素でなければ豪華でもない。

白い壁に白いカーテン。

ベットにテーブルに椅子に。

まあ、ちゃんと家具はそろってる普通の部屋。

「あ、そうそう、この部屋は隣の部屋とも扉でつながってるから。

右隣は私の自室。私室は主に執務時に使うから。

・・・今はゼンがもしかして使ってる？」

「ああ。使ってる。」

ゼンはきっぱり頷いた。

どうやら私に戻したくないみたい。

「んー、どうしようか、ルピナも久遠も近い方がいいし・・・  
・・・こうしよう、私の自室の両隣に二人の部屋を用意するってのは？」

「いいんじゃないか」

ゼンがいう。

「貴方が傍にいるなら、久遠も安心ね」

鳶蛇は微笑む。

「僕も賛成。」

雲雀は頷く。

「じゃあ、決定。」

とりあえず、自室の左隣が久遠君の部屋で  
自室の右隣がルピナちゃんの部屋ね」

私は言った。

そのあとー案内、移動、・・・いろいろあってその辺は解決した。

そして、アシユラたちは仲間探しのたびに出ることになった。

「仲間探し終えたらきてね、」

条件はそろえるから」

「ああ」

私の言葉にみんなは頷く。

ルピナや久遠は傍にいる。

「ルピナいい子でイテヨ」

「・・・うんっ」

「久遠、私は遠くにいても心は一緒だからね？」

「・・・」

鳶蛇の言葉に久遠はこくと黙って頷いた。

二人は別れを告げた。

そして・・・神魔たちは仲間探しのたびへ行ってしまった。

「・・・じゃあ、部屋に戻ろうね。」

私は久遠とルピナを促して部屋に戻った。

そして二人を自室に招いた。

「久遠君、ルピナちゃん、

これから二人のお世話をしてもらう

侍女を紹介するね。

不安がらなくていいから、ね？」

私はそう言って二人の肩に触れる。

「・・・うんっ」

「」

ルピナは私の手に安心したのか頷く。・・・が、一方、久遠はびくつと体をこわばらせた。

「久遠君、大丈夫。

私がいるから、ね？」

そう、優しく言い聞かせる。

「・・・」

久遠は私を見て・・・黙って頷いた。

「入ってきて」

私は言った。

「失礼します」

そう声を八もらせて二人の侍女は入ってきた。

「私は口コンと申します。

久遠君のお世話をさせていただきます。」

「私はトパーズと申します。

ルピナちゃんのお世話をさせていただきます。」

侍女たちはそう言つて二人と優しく手を握つた。

敬語もやめさせようかなーと不意にそう思つた。

「ロコン、トパーズ、

敬語は・・・二人に対する敬語はやめてあげてね？」

「はい、わかりました。」

二人は微笑み、頷いた。

そして二人は侍女とともに部屋に戻つた。

~~~~~久遠の様子

久遠はベットで虚ろな眼をして窓から景色を見ていた。

「食事ができましたよー久遠君」

やっぱり少しは敬語を使うロコン。

「・・・」

久遠はそれでも窓から離れない。

ロコンをみようとししない。

これは困ったとロコンは思う。

「久遠君・・・？」

ロコンは戸惑い気味に聞く。

「・・・いない」

久遠はテーブルに並べられた料理を見て言った。

・初めて言葉を発したのはこれが初めてだった。

「ですが・・・しっかり食事を取らないと・・・」

ロコンは戸惑う。

「・・・」

久遠は何も言わない。

そんな情景が数日続いた。

食べた形跡が見られない。



ついにロコンは私に言った。

「久遠君・・なかなか食べてくれないんです。  
どうしたらー」

おろおろするロコン。

「・・わかった。

私が行くよ。そうすれば少しは変わるかもしれないし」

私はそう言ってロコンには下がらせた。

コンコン

とノックしてから入る私。

そして私は久遠の部屋に入った。

「久遠君、・・・。  
大丈夫？」

私は久遠に近づき、久遠の顔を覗き込む。

久遠は虚ろな眼をして窓を見ていたが私を見た。

私は久遠の額に手を当てた。

・・ちよつと微熱だった。

無理も無い。

ろくに食べず、寝てもいないのだから。

私は一つ飴をとりだした。

「これ、食べて。  
美味しいから。」

そういつて、久遠の口元にそつと持っていった。

「・・・」

食べようとしない久遠。

私は片腕を久遠の背中にまわして抱き寄せた。

「えー！？」

久遠は驚く。

はじめてみた。

久遠の驚く顔を。

「ほらー、食べて・・・」

私は久遠に優しく言った。

「」

すると久遠は口をあけた。

そして、コロんと飴玉が久遠の口の中に入っていた。

**第二十一話 契約・魔道士・侍女（後書き）**

途中ですみません。

次回も頑張りますのでお見逃し無く！！

## 第二十二話 狐、三日月の爪痕

久遠は飴を食べてくれた。

それを確認すると

「噛んで粉々に砕いて味わって。」

私は言った。

自分で言うのもなんだけど

ゼンやアシユラとの態度はまるっきり違う。

どっちかという私はクールを装っていたほうが楽だ。

久遠やルピナに接する優しさは大変。

まあどちらも私に変わりはないが。

ガリツ・・・ツ

飴を噛む音が聞こえる。

しっかり食べてくれたみたいだ。

久遠にあげた飴は私の魔力で調合した栄養満点の飴。

久遠のように警戒して食べ物を口にしない人には一粒でも十分のも  
のだった。

副作用もあつてきつと満腹に感じただろう。

そして・・・眠くなるはず。

「な・・・っ

睡眠薬・・・いれた?」

久遠は言った。

私は久遠の体を支えながら

「入れてないよ。

第一、入れても何も得がないでしょう?」

それに久遠が眠くなるのはこのところ寝てないからでしょう?」

私は優しく久遠の頭を撫でた。

「・・・・・・」

久遠はゆっくりと深い眠りに入っていた。

「たくさん・・・寝てね?」

私はそう呟きながら久遠を抱き上げる。

久遠の体はまだ小さく軽かった。

そしてベッドに寝かせる。

そのあと、私は部屋を出た。

ルピナの方は侍女と仲良くやっているらしかった。

私が部屋に入った。

侍女は

「席をはずしましょうか？」

と聞いてきた。

「はずさなくてもいいよ。」

ルピナ、トパーズとの会話は好き？」

私は聞いた。

「うんッ好きッ」

ルピナは明るい声で答えた。

以前と比べてだいぶ明るくなった。

私と馴れ合うときもないに等しかったが・・・。  
ここまで変わるとは思いもいなかった。

久遠のように警戒してると思っていたからだ。

「そう、よかった。」

トパーズはルピナと仲良くやれてるのね。」

「はい、始めは難しかったです  
ずいぶんと親しみやすくなりました。  
気があったからでしょうかね」

トパーズは明るくほほえましく言った。

「よかった。安心したよ。」

トパーズ、これからもお願いね」

「はいっこちらこそおねがいしますっ」

トパーズは快く言ってくれた。

そして私は部屋を出た。

それからまた数日。

久遠も警戒心は解いたみたいでしっかり食事はとり始めた。

相変わらず口数は少ないらしい。

もう少し打ち解けたいと欲を出して私は庭に久遠を連れ出した。

トパーズもよくルピナと庭に出るらしい。



「久遠は・・・自然がすき？」

「嫌いじゃない」

「そっか。」

「じゃあ鳶蛇とはどうやって知り合ったの？」

「私は久遠と近くのベンチに座る。」

「・・・森で蛇と会った。」

いきなり首に巻きつかれて・・・死ぬかと思ったけど・・・それは一瞬で、次の瞬間には人型になってた。それから僕に鳶蛇はなにやら説明し始めて・・・それからいつも傍には鳶蛇がいた」

久遠は最低限の出会いを話した。

「そっか。」

「ごめんね、無理やり聞いて。」

「私は謝った。」

「なんで？」

久遠は私を見てそう聞いた。

「だって・・・久遠は・・・話したくないでしょ？森以前のこととか、どうして二人きりになったとか。出会いだけでもほんとは話したくなかったでしょ？」

「・・・。ルミーなら話してもいい。」

久遠はそう言った。

表情はなんではれたのかって顔してたけど。

「そう、ありがとう。」

でも、今はいいよ。まだ無理してる気がするし。」

「・・・。。。。?！」

久遠は茂みのほうを見た。

そして驚く。

「狐・・・!?!」

私も驚いた。

「久遠・・・おいで」

私は久遠の手を引いて茂みのほうへ寄る。

そこには狐が居た。

その狐は後ろ足に怪我をしていた。

狐を見つけた頃、城外は騒がしくなった。

「はやく怪我を治してあげようか」

私はそう言って治療し始めるが治りが遅く  
魔力を消耗するだけに終わった。

「クウウンンっ”」

狐は苦しそうに鳴いた。

「ハアツ・・・ハアツ・・・。  
とりあえず・・・城に・・・っ!？」

城外の騒がしさは城内へも響いた。

それは九尾の狐が「ー」というものであった。

たしかにこの狐は一尾のはずなのに私には一瞬九尾に見えた・・・。

その瞬間視界が歪む。

グラッ

バタンッ

私はその場に倒れた。

そして・・・

「――ルミーンッ!――!」

と叫ばれた。

その声に聞き覚えがあったが私の意識はそこで暗転していた。

## 第二十二話 狐、三日月の爪痕（後書き）

今回も頑張ったけど・・・。

なかなかイトコで終わってしまいます。

次回も頑張りますが。

さて、ルミィを呼んだのは誰でしょう？

次回に答えを出しましょう。ではまたの機会です  
話数間違えてたなんて私としたことが！（笑）

## 第二十三話 警備隊驚愕！（前書き）

ゼン視点です。 おおっ久しぶり！

## 第二十三話 警備隊驚愕！

今日は久々に外を警備していた。

俺は王の代理（今は一応？）でもあり、兵を指揮する騎士でもあった。

俺の能力も技量も認められたからには外からの信頼も得ている。  
たまに女性からこ、ここ恋文などもらいはするが・・  
俺はルミー以外に見向きはするつもりない。

ルミーが俺をどう思ってるのかは知らないが俺はそれなりに大切に思う。

そして、城外を見守る兵の一人が

「九尾だ！！九尾がきたぞ！！」

と叫んだ。

九尾！？

こんな辺境になぜ妖怪が！！

九尾とは、九つの秘伝をもつ妖怪、  
吸血鬼などとは比べ物にならないほどの高位の存在。

魔の部族の中でも異端で稀な存在の一つだ。

「うあああああつー!!」

やられた兵士の叫び声。

九尾はすぐ目の前。

もうすぐ城へ侵入を許してしまう。

「防備を固めろ！」

結界を強めるんだ!!ルミの力であとは・・・!!?」

おれは九尾を見てそう叫ぶが・

後半言葉を飲み込んだ。

「ヴアアアアアアア」

何の叫びだ。

理解できない九尾の叫び。

「ハアツー!!」

一人の兵士が九尾の前足に矢を打ち込んだ。

「キュウウンツ」!?」

前足を貫かれ、怪我を負う九尾。

苦痛に歪むそれはまるで何かを求める有様。  
一体何を求めているんだ。

その瞬間、九尾は光を放射した。



己を包み、すぐさま姿を消した。

「・・・」

一同、今起きたことに頭が追いついていけない。

姿が消えた瞬間、それは城の中へと入っていった気がした。

「引き続き、この辺りを警備してくれ！」

けが人は医務室へ。代わりのものと交代してくれ。

俺は中へ行く、後はたのんだぞ」

「はっ！」

俺の指示に兵たちは頷いた。

俺はすぐさま城の中へ。

ルミーに知らせないと・・・！！

その一身だった。

九尾がこの城を襲うなんてめったにないことだ。

あるうことかルミーに忠誠を誓う奴がいたくらいだ！

・・・笑い事じゃない、実際にたからな。妖怪の身で捧げた奴が。

そして同時に胸騒ぎ。

城内に何か入った、それが気がかりでひたすら城を駆け巡る。

そして、庭を通ると・・

ルミィの後姿が見つかった。

ルミィの腕の中には狐がいた。

「！！！」

俺はすぐさまそこへ走りつける。

そう、その瞬間だった、彼女が倒れかけたのは。

「！！ルミィ！！！」

俺はルミィの腕を引っ張って腕の中へと抱きとめる。

「ル・・ルミィ・・！」

久遠は少し混乱状態に陥っていた。

いきなりのものでビックリしただろう。

ここは俺が落ち着いていないと。

「ルミィ、しっかりしろ！！！」

抱き起こし、体を揺らすが無反応を見せない。

「久遠、落ち着け、

ルミィは気絶しただけだ。

この狐は・・・どこにいた？」

「あ・・・」

ここにいた。怪我をしてたからルミーが・・・」

俺は久遠の言葉に耳を傾けながらその狐を見入る。

それは一尾の狐だった。

だが・・・前足を怪我していた。

・・・共通していた。

あの九尾と同じ・・・

「そうか、その狐の治療もするから

久遠は狐を抱えて、部屋まで運んでくれ。

ルミーは俺が運ぶ」

「キュウウンっ」

狐がルミーを心配してか声を出す。

「大丈夫さ、ルミーは。

久遠・・・大丈夫か？」

「・・・」コクン

久遠は頷いたがどうもいつもと違った。  
抱きかかえる狐をぎゅっと抱きしめる。

ルミィはいつも以上に顔色が悪かった。

力を使い果たしたせいなのか、もっと他の理由でか。

「じゃあいくぞ」

ルミィの治療が先だ！

それが思考も感情も最優先だと感じてしまう俺はこのとき気づかなかった。

狐が妙に久遠の中でおとなしくしていることにも、

久遠が何か言いたげにしていることに気づいてやれなかったことも。

第二十三話 警備隊驚愕！（後書き）

久しぶりに書きました。

うわっ、短いですね。

ちよつと性格も変わってしまった気が・・・。

すいません。では次に・・・。

・ ・ ・ いったんシンが出てくる気配なし！！（笑）

第二十四話 予知する力\*\*にある（前書き）

ルミ―視点です

## 第二十四話 予知する力\*\*にある

私はとてつもない浮遊感に襲われた。

「!？」

思わず目を開けるとそこには久遠と狐の姿があった。

どうやら久遠に渡した部屋らしい。

「!?!」

う、浮いてる!？

足が床についていない。

どうやら夢を見ているようだ。

そして今見えている久遠たちには  
私の姿は見えない――。

久遠は狐の前足に包帯を巻いていた。

「・・・なんで怪我なんか・・・」

久遠は辛そうだった。

「クウウウン」

「えっ僕を・・・？」

狐の鳴き声になぜか驚く久遠。

・・・会話が成り立っていないのに・・・  
話に通じている・・・？

「クウウツ」

狐はなにか久遠に訴えていた。

「えっ・・・君は僕の・・・！？」

ピカーーーー！！

狐はひかりだしたー！。

えっなにがおこったのー！

おもわず私は手で光をさえぎった。

そして光りがおさまったあとー！

一尾の狐が、九尾の狐へと変わり果てていたー！。

「その姿は・・・」

「キュウンツ」

「これが本来の姿なの。」

久遠くんは私の主となるはずだったのに・・・



久遠くんは・・狐使いの敵、狼使いのやつらに・・記憶を消されて  
ー

あなたをどこかへやっちゃったんだー」

「うそだーそんなのー」。

でも、だから君をー大事だとー」

「クウウン」

「だって小さいころがずっとずっと一緒だったもん。」

だから探しに来たのー私にはー久遠くんしかいないー」

狐は久遠と思ひもしない事実を語っていた。

「キュウクウウウ」

「敵は契約を邪魔したのおー！

だからはやく契約したいー

はやくしよーよ！」

狐はとんでもないことを言い出したー

このままでは久遠がー！ー！！

「でつでもーいきなりこんなことー」。

僕は・・ツタージャが・・」

久遠は鳶蛇を思い戸惑う。

久遠はおそらく使い手と狐との契約を結んだらー  
鳶蛇との関係がー壊れてしまうと思ったのだろっ、

おそらく鳶蛇が嫉妬で狂ってしまったから。

「敵が来る前にッ！」

お願いッ！！久遠クン！！」

狐は既にヒトの言葉を使っていた。

より一層久遠にそれを伝えるためだろうと思った。

やばい――このままじゃ――！！

狐の事情も分からないわけじゃないが

このまっまだと鳶蛇のほうが安全だとかぎらない――

一体どうすれば――！！

その瞬間、瞼が重くなってきた――視界が真っ暗になったとき・

\*\*\*\*\*

――ルミ――！！ルミ――っ！！

遠くで私を呼ぶ声が聞こえてきた――。

「うつつ」

私は思わず目を開けた。

「ルミ――っ起きたか！」

そこには心配そうに見つめるゼンの姿があった。

ぼんやりとー

「ゼンー？」

視界に入るゼンを見つめ私は起き上がった。

いつのまにか寝かされていたからだった。

「ああ。

大丈夫か？うなされていたぞ？」

ゼンはいまやつと落ち着いたみたいで聞いてきた。

「ん、夢だったみたいだけどー」

夢みたいだったーでもなんかリアルだったー。

もしかしたらー！！

私はハッと目を見開いた。

「ゼンっ！今狐と久遠って一緒ー！？」

「え！？あ、ああ。久遠の部屋にー」

「なー！ー！

いますぐいかなくちやーー」

私は慌ててベットから立ち上がって行こうとしたがー

グラッ

視界がゆれ、体がふらついた。

「っ!？」

「おいっ!!!」

倒れる寸前にゼンに腕をつかまされたー！。

「ルミー!？」

なにをそんなに焦ってー！

「それは後でッーはやくしないとー！」

私はだるい体を力を振り絞って、

立ちなおし久遠の部屋への扉を勢い良くあけたー！

するとー！久遠の部屋はー！光で満たされていた！

第二十四話 予知する力\*\*にある（後書き）

おそくなりました。

スイマセン！久遠、大変ですよね、ゼンも（^。^  
^

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9471n/>

---

魔道に全てを捧げる魔道士と全てを惑わすプリンス

2011年6月15日20時25分発行